

博士論文（要約）

現代エジプトの沙漠開発の民族誌：  
ブハイラ県バドル郡地域の歴史・法・社会関係の研究

竹村 和朗



---

## 目 次

---

目次	.....	i	
凡例	.....	iii	
地図	.....	vii	
序章			
第1節	本論文の対象・目的・方法 .....	1	
第2節	構成と三つの主題 .....	3	
第3節	現代エジプトの沙漠開発 .....	9	
第4節	調査地バドル郡の成り立ち .....	14	
第5節	フィールドワークと資料 .....	23	
第Ⅰ部 開発事業の評価と歴史認識 .....			29
第1章 政治の声：バドル郡の「歴史書」から			
第1節	はじめに .....	31	
第2節	歴史書との出会い .....	34	
第3節	歴史を記す者と記される者 .....	36	
第4節	郡昇格への長い道のり .....	38	
第5節	おわりに .....	46	
第2章 個人の声：住民Gの語りから			
第1節	はじめに .....	49	
第2節	Gとの出会い .....	51	
第3節	Gの人生譚 .....	54	
第4節	市内のモスクに関するGの見解 .....	61	
第5節	おわりに .....	69	
第Ⅱ部 国家的法制度の展開と対応 .....			71
第3章 沙漠地の法：民法第874条を中心に			
第1節	はじめに .....	73	
第2節	死地蘇生について .....	75	
第3節	民法第874条の形成 .....	79	
第4節	1950年代以降の特別法 .....	84	
第5節	おわりに .....	92	

<b>第4章 売買契約書：国有地を私有する仕組み</b>	
第1節 はじめに .....	95
第2節 占有の禁止と承認 .....	96
第3節 バドル郡におけるタムリーク過程 .....	102
第4節 タムリーク規定の形成 .....	107
第5節 おわりに .....	113
<b>第III部 人々が実際に依拠する社会関係</b> .....	115
<b>第5章 苗農場で働く：沙漠開拓地における農業の一実践</b>	
第1節 はじめに .....	117
第2節 開拓地の農業と農作物 .....	118
第3節 Z農場との出会い .....	125
第4節 マシタルをする .....	130
第5節 おわりに .....	138
<b>第6章 喜びを分かちあう：結婚の祝宴と社会的紐帯</b>	
第1節 はじめに .....	141
第2節 結婚と祝宴 .....	143
第3節 ファラハに参加する .....	151
第4節 ファラハを開催する .....	157
第5節 おわりに .....	167
<b>終章</b>	
第1節 本論文のまとめ .....	169
第2節 本論文の方法論について .....	174
<b>註</b> .....	177
<b>参考文献</b> .....	199

## 凡例

### 1 アラビア語のローマ字転写とカナ表記

本論文では、アラビア語の文字資料や会話の中で重要な言葉やフレーズを、ローマ字転写やカナ表記によって表現する。その際に問題となるのが、アラビア語の「文語」と「口語」の間の連続性と乖離である。アラビア語はエジプトの「国語」であり、学育やメディア、出版物などを通じて、広く「国民」に教育され、さまざまな局面で実際に用いられている。文語は、一般に正則アラビア語や現代標準アラビア語と呼ばれ、文法規則や語彙の点で、国内的・国際的に一定の理解が共有されている（ただし、文語であっても、発音や文法理解の点には各地域の口語の影響が見られる）。他方、口語は、文語との共通性も多いが、国や地域、社会集団や階層、職種ごとに異なる言葉遣いや発音、文法上の変化や省略などの諸特徴が見られ、その表記についても共通の方法はなく、「正書法」は確立していない。

たとえば、調査地バドル郡が属する県の名は、文語の読み方では「*buḥayra*／ブハイラ」だが、口語では「*beḥeira*／ベヘイラ」や「*bḥēra*／ブヘーラ」のように発音される（少なくとも私にはそのように聞こえる。他の人はまた他の聞こえ方、表現の仕方があるかもしれない）。どのような文脈でどの表記や転写を用いるべきだろうか。また、エジプト口語（特にカイロ以北のナイル・デルタ地域）では、アルファベットの *jīm* が *gīm* に、*qāf* が *ʾāf* の音に変わることが知られている。調査地のある歴史的人物は、文語では「*Majdī Ḥasanayn*／マジュディー・ハサナイン」と読まれるが、口語では「*Magdī Ḥasanein*／マグディー・ハサネイン」と呼ばれる（ことが多い）。英語文献では発音通りに「*Magdi Hasanein*」と表記するものも少なくない。本論文では、この人物の名は、地の文と引用文の両方に出てくるが、その表記や転写をどのように区別し、あるいは、統一すべきだろうか。

文語に表記を合わせると、口語の持つ含意が落ちてしまい、口語の転写やカナ表記だけでは文語との繋がり、共通の意味が抜け落ちてしまう。どちらを重視するかによって方法は異なるが、「現地の視点」の研究を掲げる本論文では、バドル郡の人々の発音や理解を重視し、カナ表記の場合にはできる限り「現地の形」に近い（と私が考える）音にもとづいて表現する。その際、必要に応じてローマ字転写を括弧書きで入れるが、文語の転写法は、アラビア語＝英語辞書の定番であるハンス・ヴェア『現代標準アラビア語辞典』[Cowan 1994] や日本語のイスラーム研究専門辞典の一つ、『岩波イスラーム辞典』[大塚ほか編 2002] に準拠する。口語の転写表記はイタリックで表現する。意味や発音の確認のために『エジプト・アラビア語辞典』[Badawi and Hinds 1986] を参照するが、文中の表記では私が聞いた音に応じた表記を優先する。詳しい規則は以下の通りである。

### (1) 文語のローマ字転写について

- アラビア語で書かれた出版物や契約書、刊行物や法令などの単語やフレーズの一部は、文法的規則に従って、ローマ字に転写され、括弧の中に示される。
- 母音は a, i, u、長母音は ā, ī, ū、二重母音は ay, aw。
- 子音は、'（語頭では省略）、b, t, th, j, ḥ, kh, d, dh, r, z, s, sh, ṣ, ḍ, ṭ, ḏ, ʿ, gh, f, q, k, l, m, n, h, w, y。
- 名詞の語頭や語尾に付く定冠詞 al-や人称代名詞（ex. -ī, -hu）との間にはハイフン（-）を付す。例）私の心臓（qalb-ī）、その心臓（al-qalb）
- 定冠詞 al-は、続く太陽文字（t, th, d, dh, r, z, s, sh, ṣ, ḍ, ṭ, ḏ, l, n）との同化の有無にかかわらず、つねに al-と表記する。例）その光（al-nūr）
- 名詞・形容詞の語尾母音は、原則として表記しない。語尾のター・マルブータ（名詞・形容詞の語尾に付いて、女性形や集合名詞の個物名詞等を表す）は、原則として表記しないが、直前の母音は必ず a になる。例）その夜（al-layla）、昇天の夜（layla al-mi'rāj）
- 動詞の語尾母音は、文法規則に従って表記する。
- 接続詞の wa や fa、前置詞の bi や li は、続く名詞や動詞と繋げて表記する。続く語頭に alif が来る場合、a や i の音は wa に吸収され発音しないので表記しない。例）そしてその光（wa-l-nūr）、国の所有物（milk li-l-dawla）

### (2) 口語のローマ字転写について

- フィールドワーク中に記録された会話の中の重要な単語は、イタリックのローマ字に転写され、括弧の中に示される。
- 母音は、原則として、a, i/e, u/o、長母音は ā, ī/ē, ū/ō、二重母音の ei は長母音化して ē になり、aw は ō になる。
- 子音は、'（語頭では省略）、b, t, s, g/j, ḥ, kh, d, d/dh, r, z, s, sh, ṣ, ḍ, ṭ, ḏ/z, ʿ, gh, f, q/'（語頭でも省略しない）/g, k, l, m, n, h, w, y。
- 名詞の語頭や語尾に付く定冠詞 il/el や人称代名詞との間にハイフンを付す。例）私の心臓（'alb-ī／文語 qalb-ī）、その心臓（el-'alb／文語 al-qalb）
- 人称代名詞は口語で発音される音を優先する。たとえば、男性単数の-ka は-ak に。例）あなたの主（口語 rabb-ak／文語 rabb-ka）
- 定冠詞 el-は、続く太陽文字（t, t/th, d, d/dh, r, z, s, sh, ḍ, ṭ, ḏ/z, l, n）と同化して表記する。例）その光（en-nūr）
- 語尾のター・マルブータは原則的に表記しないが、イダーファ構造（二つの名詞を結合する）の場合に限り、一つめの名詞のター・マルブータを表記する。例）その夜（el-lēla）、昇天の夜（lēlet el-mi'rāg）
- 名詞・形容詞の語尾母音は、つねに表記しない。
- 動詞の語尾母音はつねに表記しない。動詞の変化規則は口語の用法に従う。

- ・ 接続詞の wa や fa、前置詞の bi や li は、続く名詞や動詞と繋げる表記する。続く語頭に alif が来る場合、a や i の音は wa に吸収され発音しないので表記しない。例) 神掛けて (wa-llāhi)

### (3) カナ表記について

- ・ アラビア語の人名や地名、重要単語や表現をカタカナで表記する。
- ・ 定冠詞「アル／エル」は原則的に省略する。
- ・ 地名や人名は、口語の発音に準じて、表記される。ただし、ブハイラ県は、文字資料にも頻出するため、例外的に文語の読みに即してブハイラとする。
- ・ 地方行政単位——県 (mudīriya/muḥāfaẓa)、郡 (markaz)、地方単位 (waḥda maḥallīya)、市 (madīna)、区 (ḥayy) ——は、日本語で対応する訳語を充てる。例) バドル郡
- ・ ḥ や h は、語頭ではハ、語中ではフと表記する。例) タフリール県

## 2 固有名詞

- ・ 著名人や政治家は、上述の転写・表記方法に従って、個人名を出す。その際、日本語（および英語）において確立した表記法がある場合にはそれを優先する。例) ナセル（カナ表記の原則に従えば、ガマール・アブドゥンナーセル）
- ・ それ以外の人の名前は、複数回参照される者には、仮名としてアルファベット (Y, Z, G, A, B, K, Q, I, R など) を充てる。1、2 回参照されるだけの者の場合、記号 (○、△など) で示す。村名は、調査地の X 村はアルファベットで表し、実名を伏せるが、その他は上記の原則に従い実名を記す。
- ・ マルカズ・バドルは、バドル郡の中心地バドル市の通称である。市内の一部モスク名やモスク建設者の名前は、地域内によく知られた人物である場合実名にしたが、場所や人物の特定を避けるため一部開示していない情報がある。

## 3 文中の言葉の表記

- ・ 欧米語・アラビア語の単語や表現の原綴りを文中で記す場合には、当該訳語の後ろに丸括弧 (()) に入れて付す（例、「開発」(tanmiya)、「開発 (tanmiya) に関する法律」）。
- ・ 丸括弧を付さない場合は、地の文の一部とみなす。

## 4 引用

- ・ 鍵括弧（「」）は、重要な単語や表現を用いるとき以外に、他の資料の文章や言葉の引用や会話内容を表すときに用いる。他の資料から引用する場合には、鍵括弧に続いて、大括弧（[]）を付し、その中に資料の書誌情報を記す。なお、本論文では文献リスト方式を用いるため、書誌情報はすべて巻末に記される。
- ・ 引用文や会話文において、著者による補足を加える場合、亀甲括弧（〔 〕）を用いる。文中の省略記号「……」は、発言者の言いよどみやぼかしを意味する。引用者が省略した部分には、〔中略〕や〔後略〕を入れる。実在する文書や契約書において固有名詞や地名、数字など、個人情報に繋がる可能性のあるものは\*\*\*によって隠す。
- ・ 法令や会話など、引用する文章が一定程度以上の長さになる場合には、一行分の行間を入れ、スペース二つ分を落として、引用文を示す。
- ・ 法令は、国立印刷局による個別の法令集がある場合にはその書誌情報を記すが、それ以外の場合はDVDに収められた法令全集[al-Majma‘ al-‘Arabī al-Qānūnī n.d.]を参照する。これは、すでに印刷された古い法令をPDFにして取り込み、DVD内のソフトウェアを通じて閲覧するものである。国立印刷局の販売店舗において売られ、公式文書のPDFを用いていることから公的出版物であることが推定されるが、パッケージにはその種の情報が一切なく、発行元は上記の「アラブ法律学院」とされる。この学院については、公式ウェブサイト（[www.laa-eg.com](http://www.laa-eg.com)）も参照のこと。

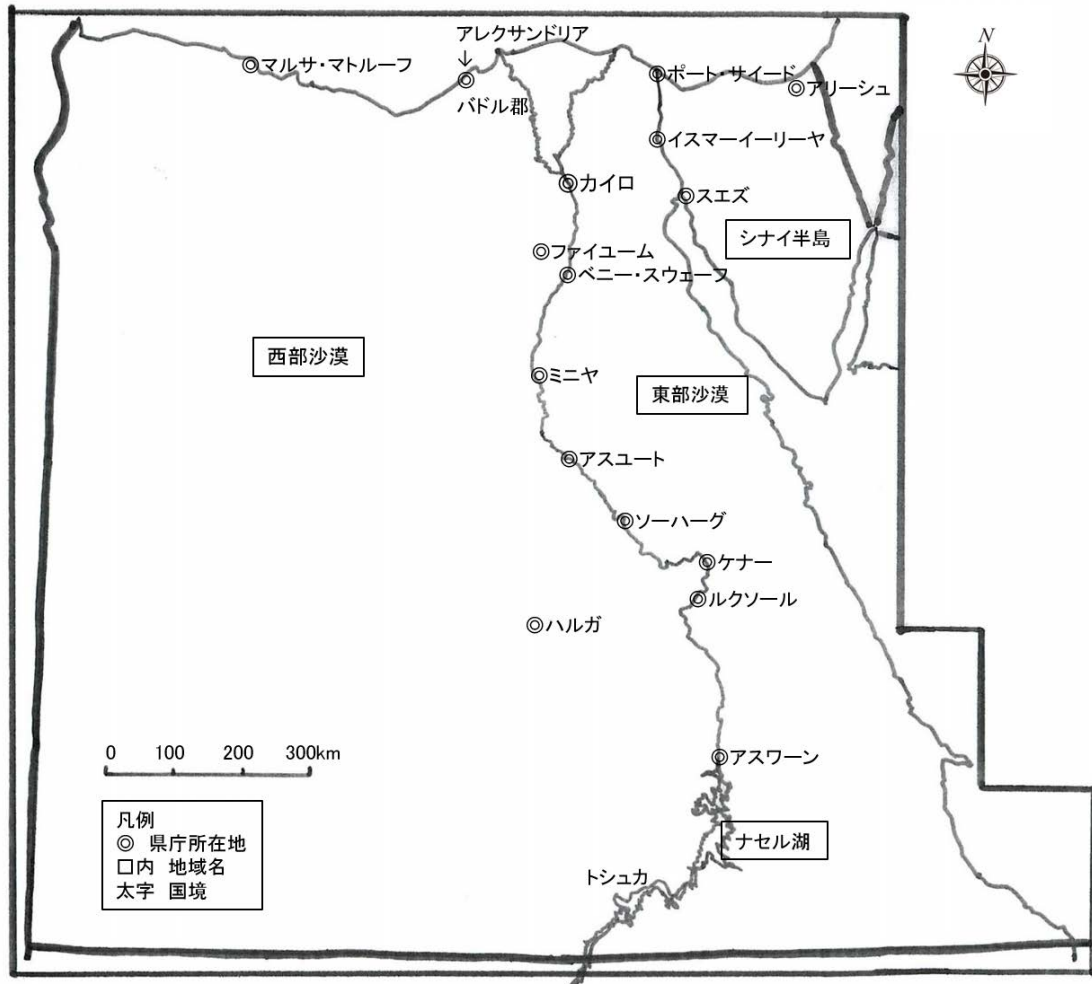
## 5 単位・通貨

- ・ フェッダーン（正則アラビア語で *faddān*、口語で *feddān*）はエジプトの土地面積の単位で、現在では4,200.833平方メートルに相当する。本論文においては、FDと略記する。下位単位のキーラート（*qīrāt*）は、1フェッダーンの24分の1で175平方メートル。さらに下位のサフム（*sahm*）は、1キーラートの24分の1で7.293平方メートル。
- ・ エジプトの通貨は、英語でエジプト・ポンド（Egyptian Pound）、アラビア語でギニー（文語 *junayh miṣrī*／口語 *ginī maṣrī*）と言う。本論文においては、地の文では通例に従い（Poundの正式表記はラテン語の *libra* に由来する £）LEと略記し、会話文ではポンドと表記する。本論文当時の2010年代初頭の為替レートは、公定レートで1LEあたり15円から17円を推移していた。



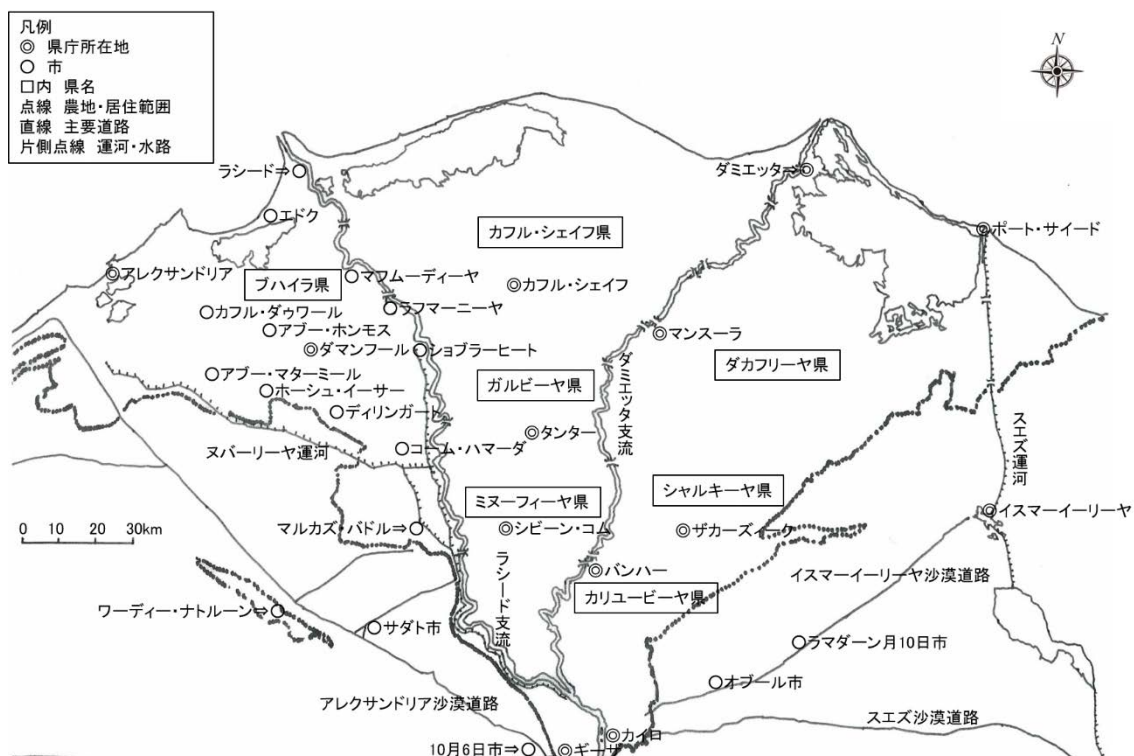
## 地図

図 1. エジプト全図



出典:『エジプト道路地図』[Sharika Shill li-l-Taswīq 1996: 6-7]をもとに筆者作成

図 2. ナイル・デルタ地図



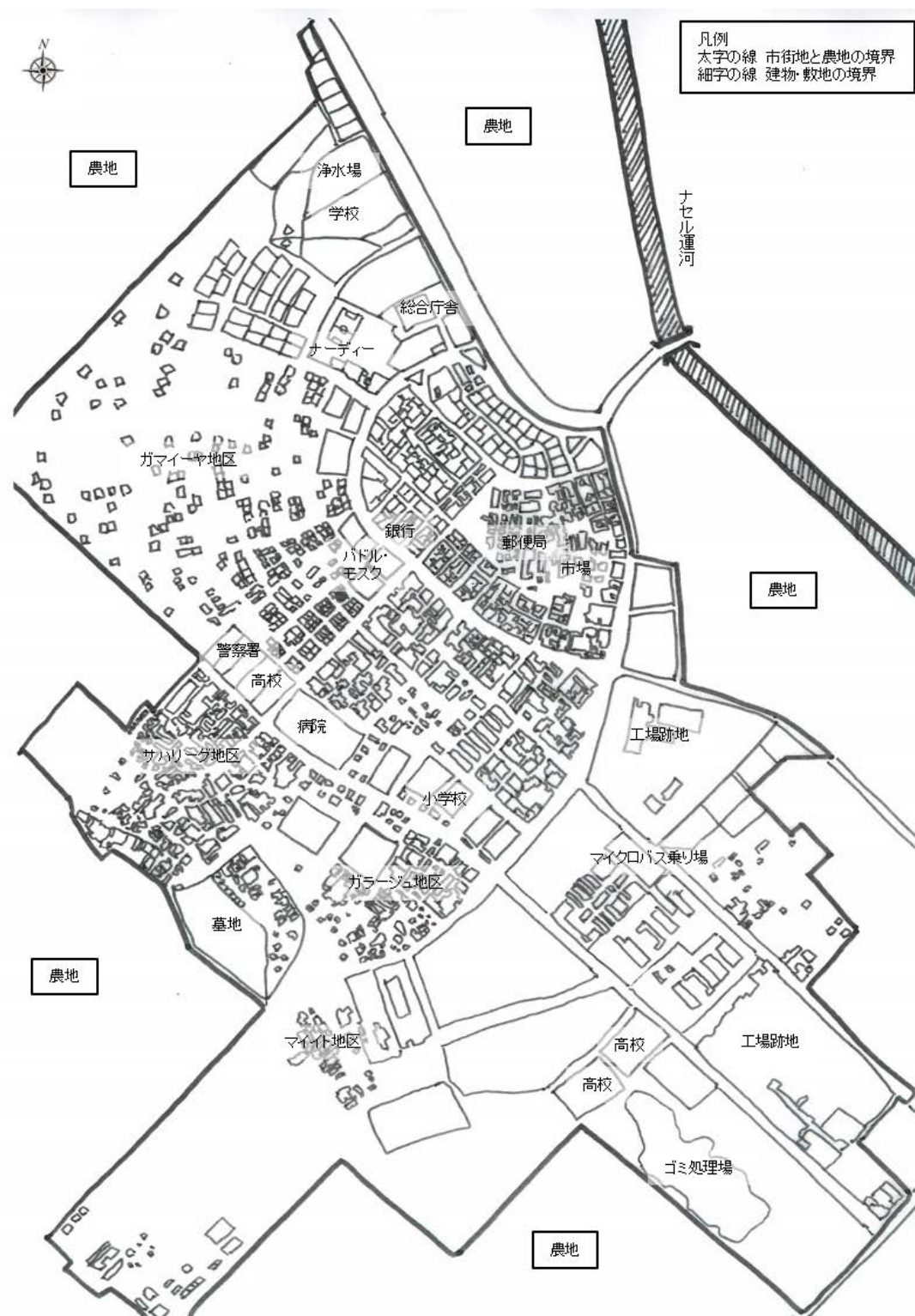
出典：『エジプト道路地図』[Sharika Shill li-l-Taswīq 1996: 96-99]をもとに筆者作成

図 3. バドル郡の周辺図



出典:『エジプト道路地図』[Sharika Shill li-Taswīq 1996: 32-33]をもとに筆者作成

図 4. マルカズ・バドル市街地



出典：バドル郡市議会所蔵「バドル市住宅地図」(縮尺 5000 分の 1)をもとに筆者作成

## 序章

### 第1節 本論文の対象・目的・方法

本論文は、現代エジプトの「沙漠開発」(desert development / tanmiya al-ṣaḥrā') について、その場の一つであるブハイラ県バドル郡地域を生きる人々が自らの生をどのように捉えているのかという点から論じるものである。

純粹に思弁的な考察を除き、人文社会科学の大半は、観察者によって知覚され、把握され得る、一定の人間の行為や思考を扱う。そのような行為や思考は、内的規則や共通性から一定のまとまりごとに分けられ、名称が付けられる。本論文で扱う現象は、沙漠の土地の利用に関わる営為であり、これを当座「エジプトの沙漠開発」と名付けておく。「エジプト」と国の名前を冠して限定したのは、自然環境や世界観、慣習や法制、記憶の厚みに目配りすることでこの現象の理解・分析をより確実なものにするためであり、エジプト一国の経験を特別視するものでも、他の国や地域の経験との共通性を否定するものでもない。また、「開発」の語は、20 世紀後半的な国家的開発事業を連想させるかもしれないが、フォーマルな開発の事業や政策だけでなく、これに積極的または受動的・周縁に関わるさまざまなアクターや行為、さらにインフォーマルな行為や実践までを幅広く含むものとして想定している。

エジプトの沙漠開発は、古来多くの国家や文明を育んできた肥沃なナイル川流域の外部にある広大な範囲、しばしば一口に「沙漠」と呼ばれる土地を耕作や住宅のために利用する試みと言い換えることができる。19 世紀から 20 世紀前半にかけて盛んに行われたナイル・デルタ周辺の干拓や灌漑整備もこの現象の歴史的過程の一部であるが、20 世紀後半以降には井戸や水路の掘削や水を扱う技術の進歩、生活基盤の拡大などにより、ナイル川流域からはるか遠く離れた地域（たとえば西部沙漠のオアシスやナセル湖岸、シナイ半島）にまで開発の波が押し寄せ、まさに「沙漠を開発する」状況を生み出した。沙漠を後背地に持つ諸都市には新しい都心や郊外が建設され、それらは沙漠を貫く複数車線の高速道、沙漠道路によって結ばれる。その道路沿いには衛星都市やゲート付きの高級住宅地、農園や防風林が立ち並び、地中海や紅海の沿岸は軒並みリゾート地に変わった。こうして沙漠開発によって創出された「沙漠開拓地」(reclaimed desert land / arḍ ṣaḥrāwīya mustaṣlaḥa) は、新たな富の源泉となり、現代エジプトの人々にとっての一大関心事になっている。

私自身、この現象を対象として調査研究を進めるほどに、謎と矛盾に満ちたこの現象に魅せられ、その構成や展開を理解したいと深く関心を寄せるようになった。しかし、本論文の目的は、「エジプトの沙漠開発の何かを明らかにする」ことでも、「エジプトの沙漠開発を題材に何かを論じる」ことでもない。そのような予め用意された「問い」は、私の自文化中心主義的認識から発せられた問いとして、民族誌表象の権力性に対するポスト構造主義的批

判を経た現在（とりわけ、『オリエンタリズム』[Said 1978]と『文化を書く』[Clifford and Marcus 1986]を経た21世紀現在となつては）、到底成り立ち得ないと考えられた。その代わりに、私が本論文において明らかにしようとしたのは、沙漠開発現象によって作り出された地域に生きる人々が自らの置かれた環境をどのように認識し、それをどのように考え、表現し、そしてその中でどのような行動をとっているのか、である。エジプトの沙漠開発という特定の政治・経済的状況をコンテキストとし、バドル郡の人々の経験や言動をそれぞれの個性と複数性をそのままに、調査者の私自身を含めてテキストとする新しい民族誌のあり方を提示したいと考えている。

このような沙漠開発の具体的な姿を描き出すために、本論文では、議論の材料を特定の場限定する。本論文で扱うその場は、ナイル・デルタの西端を少し越えた沙漠地に広がるブハイラ県バドル郡地域である。この地域は、1950年代初頭に実施された沙漠開発事業「タフリール県計画」によって生み出された。この計画は当時としては大変先進的な内容と理念を持っていて、ナイル・デルタの西側を流れるブハイラ運河から新たな運河（ナセル運河）を分岐させ、その水を使って沙漠地を耕作し、農民に分配するだけでなく（これ自体当時の技術的・社会的水準からすれば野心的な取り組みであったが）、その農民たちに近代的な価値観や衛生管理、スポーツや音楽、新しいジェンダーを教え込むことで「新しい農民の創造」を目指したものであった[El Shakry 2007; Hasanayn 1975]。ただし、この先鋭的な計画は主導者の失脚によりほどなく瓦解し、その後は近隣のブハイラ県コーム・ハマダ郡の行政下に置かれ、農地改革省（現在の農業・土地開拓省）の指導の下、農業に特化した政策地域（当時の呼称では「南タフリール地区」）に変化させられた。その後2001年にブハイラ県の第15の郡として、「バドル郡」が設置され現在に至る。後述するように私は2004年にこの地域を初めて訪れ、2010年から12年にかけて、断続的な滞在と頻繁な移動を含めた長期的フィールドワークを行った。

フィールドワークでは、先ほど述べたように予め「問い」を用意するのではなく、バドル郡で出会った人たちがそれぞれ関心を持っていること、気にかけていること、よく語りよく行っていること、尋ねてもないのに教えてくれること、または、尋ねてもなかなか教えてくれないことに注意しながら、観察・対話に努めた。そしてそこから以下の三つが主題として浮かび上がってきた。それは、①この地域の発端となった開発事業とその上に作られた地域社会に対する人々の考えや評価、②人々に直接利害関係がある沙漠開拓地の所有に関わる法制度の展開と対応、③人々がこの地域を生きる中で実際に依拠する社会関係、である。本論文では、これら三つの主題を部として各2章を割り当て、全3部6章から論じていく<sup>(1)</sup>。

以下では、第2節でこれら三つの主題のおおよその範囲を定め、第3節で現代エジプトの沙漠開発の流れを概観する。第4節では調査地ブハイラ県バドル郡の現状を紹介し、第5節では本論文の記述のもととなったフィールドワークと資料を説明する。

## 第2節 構成と三つの主題

### (1) 開発事業の評価

第一に取り上げるのは、現在のバドル郡地域の発端となった開発事業「タフリール県計画」に対する人々の評価である。開発事業に着目することは、沙漠開発を研究対象にしていた私の研究関心にとっては自然なものであり、私がバドル郡社会の歴史や発展を人々に尋ねるとき、ある程度、タフリール県計画の話を想定していたことは否定できない。しかし意外なことに、バドル郡の人たちは自らタフリール県の話を取り上げたり、私にタフリール県のことを知っているか確認してきたり（知っている場合には感心したような素振りを見せる）してきた。1950年代に実施されたタフリール県計画は、2010年代の人たちにとってはナセル大統領と同じく、自らが体験したことがない「過去の話」であるにもかかわらず、タフリール県の名は繰り返し言及され、この地域の歴史認識の中に根を張っているように思われた。同時に、タフリール県の話がなされることによって、タフリール県とは直接関係しないその他のヴァージョンの話が語られる機会が奪われてしまい、その後半世紀以上にわたってこの地域で積み重ねられてきた可能性のあるさまざまな出来事、著名人や名士の話、「社会の記憶」を覆い隠してしまっているようにも思われた。

開発研究では、開発事業の実施と初期の展開に焦点を当てることは、きわめて自然な流れであり、オーソドックスな手法である [cf. Scudder 1991]。開発事業に費やされた公金の効果を計り、開発によって影響を受ける地域社会や人々への利益分配を監督し、負担を被る人々への配慮を担う点で、開発事業の「外部評価」は実施過程の重要な一部をなしている。エジプトの沙漠開発に関する研究においても、タフリール県計画 [Warriner 1962; Saab 1967] を含む特定の事業計画の評価 [Tadros 1975; Fahim 1975] や、一定の時期や分野ごとの複数の事業計画の一括評価 [Voll 1980; Sims 2010; 2014] がしばしばなされてきた。一方、こうした開発事業評価のデメリットは、事業の影響や展開を短期的にしか捉えられず、実施からしばらく後に生じた変化や方向転換を含むことができず、経済的指標を重視するあまり、社会的・文化的影響を見逃しがちである点が挙げられる。これらの批判点は、すでに「開発計画の民族誌」と呼ばれる研究群によっても明らかにされ、長期的な政治経済の変動や開発の影響下にある人々の主体的関与に注目する必要性が提起されている [ex. 石井 2007; 竹村 2008a]。バドル郡に関する最も重要な先行研究であるニコラス・ホプキンスらの共同調査 [Hopkins *et al.* 1988] では、1980年代当時から過去を振り返り、約30年にわたる歴史的变化を視野に入れていたが、公的政策を通じて沙漠開拓地を入手した「受益者」を調査対象者としたことから、従来の開発事業評価報告の枠組みを乗り越えることができなかった。

本論文第I部の2章では、バドル郡地域におけるタフリール県計画の評価を通じて、開発事業に対する「現地の視点」を考察する。第1章では、バドル郡の地方行政機構の一部局が発行した地域史的冊子を題材として、バドル郡の人々の歴史認識の形とその知識の在り処を検討する。この冊子はその名も『タフリール県は革命の申し子』[‘Ammār 2003] と言い、



一開発地域の歴史を、その計画を生み出した「1952 年革命」に結び付ける野心的な（しかしこの種の行政刊行物としてはありがちな）展望が示されている。私がこの冊子を手に入れたのは、バドル郡の中心部の町、マルカズ・バドルに住み始め、地域や町に関する歴史的な記録、個人的な手記や日記、昔の町並みを写した写真などがなく、住民に尋ねていたことである。大半の人は「そんなものはない」と言下に否定したが、一握りの人が「ある」と答え、見せてくれたのがこの冊子であった。実は私はすでに地域の行政責任者の一人と会う機会があり、その人からこの冊子を「贈り物」として貰っていたが、内容を一瞥して、あまり重要性を感じずそのまま放置していた。町の住民がこの冊子を指示して「歴史書」とみなしたことが、その価値に気づき、丁寧に読解・分析するきっかけとなった。

この冊子は題名と裏腹に、最初期のタフリール県計画と関係がない、ある政治家をこの地域の歴史を変えた重要人物とみなし、その業績を称えている。しかし、この政治家は住民からそれほど重要視されていなければ、特別尊敬の念を抱かれてもいないようであった。この意識の乖離に、公的な記録としての歴史と個々の人間にとっての記憶の差が如実に現れている。バドル郡の人々に地域の歴史的人物の名を尋ねれば、一にナセル大統領、二にマグディー・ハサネインの名が出てくる。ハサネインはタフリール県計画を主導した軍人だが、途中失脚したこともあり、彼の名前はこの冊子にもほとんど出てこない。その次に誰の名が出てくるかによって、地域の歴史に対する個人の評価や理解が表わされるはずである。しかし、そうした個人的な話は、当初なかなか聞くことができなかった。そもそも前述の冊子を紹介されたのも、知りたがりの外国人研究者（アラビア語で *bāhith* は「調査者、探す者」、同語根の *mubāhith* は「刑事、捜査員」）をやり過ごし、遠ざけるためではなかったか。

私が「お前だけに話す話」を聞くことができるようになったのは、互いに打ち解け、親しくなった一部の人たちからである。その一人がアパートの大家 G であった。G は親しくなるとつれ折々に人生譚を語ってくれたが、これが第 2 章の語りの題材となっている。あるとき、私が市街地の歴史的発展を検証するために、モスク（イスラーム教の礼拝所）の成立年を調査しようとしたのに対して、非エジプト人で非ムスリム（イスラーム教徒）の「よそ者」である私がそれをするによって引き起こしかねない問題性を指摘し、調査の代行を買って出てくれた（その代わりに私は G が愛する歌手ウナム・クルスームの指定された楽曲を探し出し、G の携帯電話にデータを入れる役目を担った）。G は後日調査結果をもとに、モスク成立の単純な事実だけではなく、関連する個人史物語を思い起こし語った。その物語からは、ムスリムにとって宗教的・社会的に重要な場であるモスクを自らの財力と意思によって建てる「慈善」のあり方が伝わってくる。と同時に、慈善はすべて善とみなされるわけではなく、G がある人の行為を高く評価し、別の人を低く評価したことも見えてきた。G の人物評価は、歴史冊子に表れる特定の個人の称賛の様式と共通するようにも見える。

本論文第 I 部では、これら 2 章の議論から、開発事業の評価について現地の人々がどのような点に目を付け、どのような論理でそれを表現するのか、明らかにしていきたい。



## (2) 沙漠地の法制度

本論文で第二に取り上げるのは、沙漠開発の中にいるバドル郡の人々が直面し、対応するようになった、沙漠地に関わる法制度である。国家的開発事業や政策による土地分配や受益者の選定を伴う沙漠開発を論じる上で「法」に注目するのは、一見自然なことである。これまでの研究においても法の存在は意識されてきたが [ex. Cole and Altorki 1998; Hopkins *et al.* 1988; Sims 2014]、エジプトの沙漠開発に関わる人文社会科学的研究の中で、法令や法制度の具体的な内容や意義に正面から取り組んだものはほとんどない。私自身、バドル郡でのフィールドワークを行う前には、沙漠開発現象と法の繋がりを意識しておらず、研究上の重要性を正確に認識できてはいなかった。とりわけ法学は(エジプトでも日本でも)専門的な知識・技術・職種であり、弁護士や裁判官、法学研究者などの一部の者にしか関わらないものと考えていたので、法との接点になかなか辿りつくことができなかった。そうした中、私が生活の中の「法」の存在に気付くきっかけは、バドル郡における土地所有や売買について尋ねた際にアパートの大家Gが見せてくれた一通の土地売買契約書であった。この契約書こそが、「法」の世界への入り口となった。

なお、ここで「法」と述べているのは、「国家法／カーヌーン」(qānūn) のことで、憲法(dustūr) や行政官庁の決定(qarār) や命令(amr, lā'iha) を含めた制定法全般を指す。他方、前近代の中東・イスラーム世界で「法」と言えば、非成文法であり、法学者(faqīh) によって解釈・裁定される「イスラーム法／シャリーア」(al-sharī'a al-islāmīya) が主流であり、カーヌーンは支配者による布告や勅令などの命令一般を指す言葉であった [cf. 加藤 1993]。ところが 19 世紀以降の近代的法体制の確立を通じて、「シャリーア」と「カーヌーン」、それに各地で実践される「慣習法／ウルフ」(‘urf) が合わせられ取捨選択されて、近代法の形式に則って条文化され、近代的な「法」が制定されるようになった [堀井 2004a]。現代のエジプト社会では、このカーヌーンにもとづく司法体制が裁判制度や訴訟・行政登記等の法的手続きを通じて広く浸透している。しかしエジプトを含めた中東の法の研究は、現地の法実務者(裁判官や弁護士、法学者) による法解釈や判例集、専門的な法学研究 [cf. Najīb 2003] の莫大な蓄積が存在する一方で、英仏語による比較法学や政治学研究 [cf. Brown 1997; 2002; Gerber 1994; Moustafa 2007] がわずかに触れるのみで、国際的研究や専門分野を超えた研究はほとんど手つかずのままである。近年では、近代期のシャリーアとカーヌーンの接合に歴史学的・法学的関心がようやく向けられるようになってきている [大河原・堀井・磯貝 2011; 大河原・堀井 2014; Debs 2010]。他方で、法学とはまったく異なる文脈から非西洋社会における「法」に注目してきた法人類学や法社会学は、多元的法構造への強い関心から、アジア・アフリカにいまなお残る「慣習法」に特化したものが主流となり [大森 1987; ローゼン 2011]、社会の中の法の役割に着目した研究は発展途上のままにある [高野 2015]。

本論文第 II 部の 2 章では、バドル郡の人々の生活に深く関わる土地(沙漠地)の法制度の展開を跡付け、その制度に対する人々の対応や評価のあり方を考察する。まず、第 3 章では、現在および過去の諸法令にもとづき、基本的な土地範疇である「沙漠地」と「沙漠開拓

地」が近現代エジプトの法制史の中でどのように、そしてどのようなものとして、形成されてきたのかを明らかにする。これは、前述の G の土地売買契約書を理解するために、必要不可欠な準備作業となる。当然のことながら、土地売買契約書には法の専門用語が多く含まれている。普通のアラビア語の文書や行政刊行物が一般的なアラビア語読解能力があれば理解できるのに対して、契約書は特有の用語法があり、契約書の内容を見た当初、私にはその意味や意図を理解できるかどうか不安であった。契約書を保有する G にしても、法律の専門ではないためすべてを理解しているとは思えなかったが、解説を聞く限り一定の理解を持っているようであった。G の「視点」を私が理解するためには、最低限、基本的な法律用語法と、主題となる沙漠地の法的概念に関する基礎知識が必要だと考えられた。そこで私は首都カイロに赴き、法令を出版する国立出版局の販売所で関係のありそうな法令出版物を買い集め、近辺の法学専門書店で法学書や注釈書を購入し、それらを少しずつ読み進めた（「エジプト 2012 年憲法」を翻訳したのはこのためである [竹村 2014a; 2014b]）。

沙漠地に関する法制展開を調べる中でしばしば遭遇した条項が、1948 年に制定された民法の第 874 条「所有者のない非耕作地の先占」である。ここでは国土の広大な沙漠地が「所有者のない非耕作地」と定義され、第 1 項でそれらが以後「国有財産」となることが定められ、第 2 項で「国の許可のない占有は禁止される」が、例外規定として第 3 項で「ただしエジプト人が耕作や建設をした場合には認可される」と定められた。エジプト民法の研究書はこれをイスラーム法における「死地蘇生」の原理と同じとみなしている [Debs 2010]。他方、後に制定された法令ではこの原理が否定され、徐々に沙漠地に関する法制が変化し、整えられてきたことが明らかになった。本論文の第 3 章では、これら沙漠地に関連する諸法令の条文から読み取られる「沙漠地の法」を再構成した。

これに対し、第 4 章ではそのような規則の変化を踏まえた上で、G の土地売買契約書の内容を改めて読み返し、そのような契約書を得るに至った経緯を含めて、内容の分析を進めた。鍵となったのは、G が言及した「タムリーク」(tamlīk) であった。これはバドル郡で 1970 年代頃に行政主導で進められた手続きで、占有状態にある土地（沙漠開拓地）について、測量の実施と土地台帳への登録、一定の代価を支払うことにより、その所有権（すなわち土地売買契約書）を得ることができるものであった。この手続きは G 以外のバドル郡住民からも確認され、契約書上にも用語が見られた。しかし「許可のない占有」が法令上禁止されているはずであるのに、なぜそれが可能であったのかは謎が残った。そこでタムリーク手続きに関する諸法令を調べる中で、1970 年代末から 80 年代半ばにかけて出された一連の農業省令が見つかり、その分析からタムリーク手続きの展開が明らかになった。そこでは、本来的に所有関係が曖昧な「沙漠地」の所有権がどのように確定され、その「占有」がどのように認められ、または禁じられるかが雄弁に述べられている。

本論文第 II 部ではこれら 2 章の議論から、バドル郡を生きる人々にとっても重要な要素となっている沙漠地の法制度の歴史的展開とその意義を考察する。

### (3) 人々が依拠する社会関係

本論文で第三に取り上げるのは、沙漠開発を背景にした社会を生きる上で、バドル郡地域の人々が実際に依拠している社会関係や慣習的制度である。ここで強調したいのは、「実際に依拠している」という点である。「実際に」の判断は観察者の主観に拠るところが大きく、決して厳密ではないが、少なくとも理念や規範として表現された言葉だけでなく、具体的な行為や労力の点で現象的に確認できるかを重視している。これは、エジプト社会論で長らく、政治的・社会的連帯の中核として「拡大家族／アーイラ」(‘ā’ila)や「部族／カビーラ」(qabīla)に研究関心が集中し〔木村 1991; 中岡 1991; 加藤 2010; 2012〕、あたかもこれらが実生活における社会関係をすべて規定しているかのように扱われてきたからである。勿論、アーイラやカビーラが社会的対応物を持たない空虚な概念であるとは言えず、現代においても再構成される状況も観察されている〔Bach 2004; Nielsen 2004〕。しかしエジプト人の相互関係がすべて親族関係によって理解できるとみなすことにも無理があるだろう。それよりも人々が「実際に」社会関係を想起する場面にこそ注目すべきではないだろうか〔Eickelman 2002〕。

エジプト社会関係論のすべてをここで見直すことはできないが、少なくとも、沙漠開発の文脈では社会関係を変容させる契機として、土地を手に入れる可能性と、移住者からなる新しい社会の形成の2点が認められる。すでに第II部で沙漠地の「先占」が議論されたが、従来議論されてきた沙漠開発の最大の利点は、特定社会層への土地分配にあり〔Mar‘ī 1957〕、開発事業や政策の初期的段階に注目した研究報告では、もっぱら土地を入手した「受益者」に焦点が当てられてきた〔ex. Fahim 1975; Tadros 1975〕。1980年代に調査を行ったホプキンスらは、「受益者」が必ず入会する農業協同組合の成員名簿をもとに調査対象者を選んだが、受け取った土地を親族に貸した事例や借金のため手放した事例も含まれていた〔Hopkins *et al.* 1988: 66–75〕。そこに示唆されるように、土地は分配されれば終わりではなく、一旦誰かの財産になった後もその人の社会的・経済的事情により分割されたり移譲されたりし、相続や売却の際に社会関係が想起・強化され、または衝突し弱体化する可能性もあるだろう。他方、沙漠開発は「誰もいない」沙漠地に人を移動させ、異なる背景を持つ人々を新たに交流させる作用を持つ。前述のホプキンスらの研究では、同様の「受益者」範疇に括られた人たちが同じ地域に住まわされる中、「同郷者」と「職場の地位」が社会関係の指標となることが指摘された〔Hopkins *et al.* 1988: 75–87〕。同様に、苦難の共有や移住者同士の通婚が新集落における共同意識を芽生えさせていることも報告されている〔Sabea 1987〕。それでは、2010年代のバドル郡では、どのような社会関係が認められるのだろうか。

本論文第III部の2章では、私が実際に観察した現象として、経済活動・農業に関わる苗農場と、社会組織・婚姻に関わる結婚の祝宴を考察する。まず第5章では、苗農場を取り上げる。苗農場は、その名の通り、野菜や果物の苗を育てることに特化したビジネスで、市場に需要のある高品質の種を買い、温室で育て、耕作者に苗を売ることにより利益を得る。耕作者を主とすれば、あくまで従であり、農業界の脇役に過ぎないが、少ない資本とノウハウがあれば始められ、野菜や果物の栽培よりも短時間で結果が出るため、若い世代に人気があ

る。農業技師の資格が必要な農薬・肥料専門店、工学知識が必要な農機具専門店など異なり、農業の「素人」でも参入できる点に特徴があり、耕作者と比べて土地に対する初期投資が少なく済む点に利点がある。このような苗産業に参入しているのは、どのような人たちなのだろうか。第5章では、私が知り得たZ農場を事例として、経営者のZと、Z農場で働く農業技師のYの2人のやり取りを描き出す。「受益者」の息子であり、湾岸諸国に出稼ぎに行き成功した兄弟を持つZと、それほど豊かではない家庭の長男として生まれ、独立独歩の道を歩いてきたYは、同じようにバドル郡に生まれ育った者であっても出発点に歴然たる差がある。2人は雇用者・被雇用者として関係し、互いを「同郷者」「親族」と呼び合うが、決して「兄弟」「共同経営者」とはみなさない。苗農場を通じてどのような社会関係が想起され、結ばれているのか。彼らの言動からそれを読み取っていく。

第6章では、バドル郡に滞在する中で頻繁に遭遇した社会的行事である「結婚の祝宴」を取り上げる。親族関係は国内諸地域の出身者が集まったバドル郡でも重視され、「あの村は〇〇一族ばかり」「あそこは××出身者の村」のような表現をしばしば耳にした。しかし実際に婚姻関係や親族関係を尋ねると（そのような調査はつねに難しいが）、主張された以上に複雑なパターンが見つかる場合が多かった。バドル郡住民の出身地は、ナイル・デルタ諸県（ガルビーヤ県やミヌフイーヤ県）のみならず、上エジプト諸県（ケナー県やファイユーム県）など多岐にわたる。さらにそれら地域の出身者や子孫同士が結婚している場合もあり、父方と母方の両方を考慮に入れる必要がある。いずれにせよ、親族関係を過度に重視することは、社会関係を系譜上の関係に固定して「誤解」してしまう惧れがある。そこで私は、社会関係が動的に構築される現場として、婚姻に関わる祝宴に着目した。

バドル郡において結婚は、エジプトの他の地域と同様、宗教的・法律的に定められた婚姻の契約等の手続きの後に、社会的承認として「祝宴」を行うことで完了する。都市部では、祝宴がホテルなどの施設で行われるようになるにつれ、出席者を予め選定し、招待する方式が多くなっているようであるが[Amin 2000]、バドル郡では(おそらく農村地域と共通して)路地や空き地を利用して祝宴会場が設置され、招待の有無を問わず参加を認める「伝統的」形式が維持されている。この祝宴は「ハレ」の場であり、バドル郡の人々はさまざまな理由や関係性にもとづき、互いを招待し、参加しあっている。そのような招待と歓迎の応酬は、親族関係を理由にする場合も多いが、職場や商売関係、隣人、友人など状況に応じて理由はいくらでも作り出される。私自身がZやYに連れられて、結婚の当事者たちと面識のないまま、祝宴に参加したことからもその柔軟性が窺える。多額の費用を要する祝宴は、結婚を望む未婚の男女にとって大きな障害になっている。それでも人々が祝宴を開き、他人を招き、歓待するのはなぜか。どのような社会関係に依拠することにより、祝宴の場を乗り切っているのか。第6章では、Yの妹の祝宴とGの次男の祝宴を事例にその具体的様相を描写し、バドル郡における社会関係のあり方を考察する。

### 第3節 現代エジプトの沙漠開発

本節では、本論文の対象となるエジプトの沙漠開発について、①エジプト的性格、②政治・政策面の流れ、③沙漠開拓地の行政管轄、の3点から概観を示しておきたい。

#### (1) 沙漠開発のエジプト的性格

エジプトの沙漠開発の根幹には、古代エジプト文明以来のこの地の中軸たるナイル川と、その周辺に広がる沙漠のコントラストがあり、沙漠開拓地は肥沃なナイル川流域と不毛な沙漠地の中間にある「どちらでもない空間」にあたる。その曖昧さを巧みに言い表したのが、人類学者ドナルド・コウル、エジプト人経済学者ナイーム・シルビニーおよび統計学者ナディア・ギルギスによる共同研究報告書『エジプトの西部沙漠における投資家と労働者』[Sherbiny, Cole, and Girgis 1992]の序文である。以下、やや長いが引用する。

古代エジプト人は、彼らの世界を、ケメトすなわち「黒い土地」と、デシェレトすなわち「赤い土地」に分けた。ケメトは、ナイル河谷とデルタを意味し、その豊かで黒い堆積土と命を恵むナイル川の水と結びつけられ、それらは古代エジプト人が世界でもっとも偉大な農耕文明の一つを生み出す環境的基盤を与えていた。デシェレトは、ケメトの東西に広がる広大な乾燥地を意味した。その土地は住みにくく危険で、悪の精霊の住処であり、セト神——自然の無慈悲さと結びつけられる——によって支配されると考えられていた。

数千年後、現代のエジプト人たちは、同じ二項対立を用いて、彼らの国を「エル＝ワーディー」すなわち「河谷」、と「エル＝ガバル」、文字通りには「山」すなわちエジプトの文脈では沙漠とに分けた。ナイル河谷とデルタ（以後ワーディーと表記）は、エジプト・アラブ共和国の主権領土である100万平方キロメートル超の約4%を占める。過去同様、現在のエジプト経済・社会・文化は、圧倒的にワーディーにもとづく。[中略]

ワーディー出身の現代エジプト人の文化において、沙漠——エル＝ガバル——はいまだ危険な場である。それは、環境的に住みにくいだけでなく、ジンやアフリートのような、悪意のある、あるいは、潜在的に悪意のある精霊の領域であり、ハラミーヤ、つまり「盗賊」と「無法者」とに——少なくともその一部として——結びつけられる住処である。それにもかかわらず、最近の数十年間、「赤い土地」の一部が（いまや「新しい土地」あるいは「開拓地」と呼ばれるようになり）農業生産やその他関連する土地利用に用いられるようになるにつれ、沙漠地とワーディーの古い農業地の間の境は、次第に曖昧になってきた。[Sherbiny, Cole, and Girgis 1992: 1]

コウルはもともとアラビア半島のベドウィン（とりわけラクダを飼う移動牧畜民）に興味を持ち、現代国家による介入や変化、定住化政策を論じてきたが [Cole 1975]、エジプトの

沙漠地域居住者に関するこの共同調査によれば、1990 年代初頭、すでに沙漠はベドウィンだけのものではなく、ナイル川流域から移動してきた投資家と労働者（さらには行楽客も）が交じり合う場になっていた [Cole and Altorki 1998]。

文中で言及される「新しい土地」(new lands / arāḏī jadīda) の表現もエジプト的理解のあり方を示している。この語は「古い土地」(old lands / arāḏī qadīma)、すなわち、古代エジプトにおける「黒い土地」、ナイル川流域の肥沃な耕作地を対義語として構成される。これらの語が用いられ始めた時期は明らかではないが、現代のエジプト農業では、「古い土地」は 1952 年革命までに存在していた耕作地として、およそ 600～650 万フェッダーン (FD) 程度とみなされる [Kishk 1999]。文中でコウルらはこれを国土の「4%」と述べている。1FD は 4,200 平方メートル (0.0042 平方キロメートル) であるから、多めに 650 万 FD とみなしても 27,300 平方キロメートルである。エジプトの国土はほぼ 100 万平方キロメートルであるので、この数字は 2.7%、つまり 3% 弱にすぎない。この「4%」の数字は、エジプト近現代史研究者のティモシー・ミッチェルが引用する 1980 年の世界銀行報告書でも用いられている。マイル (英米の法定マイルは 1,609.3 メートル、以下 1.6 キロメートル) で計算されているので若干の誤差もあるかもしれないが、ミッチェルの文中では「エジプトの国土は 386,000 平方マイル」すなわち、988,160 平方キロメートルで、それに対しナイル河谷・デルタの範囲は「15,000 平方マイル」、すなわち 38,400 平方キロメートルであるとされる。これは 3.88% であるので、「4%」としても過言ではないだろう [Mitchell 2002: 209]。

表 1. エジプトの合計耕作地面積 (2001–2012 年) (単位は FD)

年度	合計耕作地面積		
	合計	新しい土地	古い土地
2001	7,945,574	1,540,240	6,405,334
2002	8,148,040	1,661,118	6,486,923
2003	8,113,219	1,655,402	6,457,817
2004	8,278,654	1,655,368	6,623,286
2005	8,384,768	1,736,438	6,648,330
2006	8,410,986	1,754,826	6,656,160
2007	8,423,079	1,887,024	6,536,055
2008	8,432,186	1,978,110	6,454,076
2009	8,783,214	2,626,683	6,156,531
2010	8,741,122	2,623,399	6,117,723
2011	8,619,427	2,548,208	6,071,219
2012	8,799,439	2,780,044	6,019,395

(エジプトの『統計年鑑』[CAPMAS 2014: 113]より)

この 38,400 平方キロメートルをフェッダーンに直すと、約 914 万 FD に相当するが、公式統計上、現代エジプトの合計耕作地がこの数字に届いたことはない。従って、「4%」は、農地のみならず住宅地や工業用地までを含めたものだと考えられる。たとえば、手元にある 2014 年の『統計年鑑』[CAPMAS 2014] の第 5 部「農業・土地開拓」に記載される 2001 年から 2012 年までの「合計耕作地」の表によれば、2001 年の 7,945,574FD から、多少の増減を伴いつつ、2012 年の 8,799,439FD に至る（表 1）。

これに対し、5 年古い 2009 年の『統計年鑑』[CAPMAS 2009] の第 1 部「人口」に含まれる「2009 年 1 月 1 日付の県別居住面積・人口・人口密度」の表によれば、国土の総面積 1,009,449.8 平方キロメートルに対し、居住面積が 78,990.2 平方キロメートルであり、居住面積の比率は約 7.83%に相当する [CAPMAS 2009: 55]。仮に、表 1 の 2009 年の合計耕作地面積 8,783,214FD、すなわち 36,889 平方キロメートルと 2009 年 1 月 1 日付の居住面積 78,990 平方キロメートルとが重複しないものとみなし合算すると、合計 115,879 平方キロメートル、約 11.5%に相当することになる。この数値によれば、国土の 1 割が農業・住宅利用に供されており、残り 9 割はそのような具体的な利用目的が明らかではない状態、すなわち「沙漠」のままであると考えられる。

このように、エジプトの沙漠開発の前提には、肥沃であるが人口過密のナイル川流域と、9 割以上もの広大な「未利用」の沙漠地との間の不均衡が想定されている。

## (2) 沙漠開発と政治

それでは、20 世紀後半以降の現代的な沙漠開発現象はどこでどのような形で展開してきたのだろうか。全体的な傾向は、以下の三つの時期区分から説明される。

第一に、1950 年代から 60 年代にかけては国家主導の沙漠の耕作地化が主流であった。1950 年代は「タフリール県計画」や地中海沿岸部の干拓事業「エジプト・アメリカ農村改良事業 (Egyptian American Rural Improvement Service, EARIS)」[Tadros 1975; 1978] などの実験的事業が行われた [al-Jabalī 1985]。1960 年代前半には経済五ヵ年計画の農業部門に組み込まれて関連予算が急増し、ナセル大統領の大号令の下、「毎年 10 万 FD の開拓地拡大」を目指して各事業が進められた [Waterbury 1979: 137; Voll 1980]。背景には、アスワーン・ハイダム建設による灌漑用水の確保が予想されたことやそれに伴うナショナリズムの高揚が指摘される [al-Jabalī 1985: 35; Kishk 1999: 107–108]。これらの事業はナイル川流域の外縁部を舞台としたが [Voll 1980: 131–138]、遠く離れた西部沙漠のオアシス地域においても地下水にもとづく「新河谷計画<sup>(2)</sup>」(mashrū‘ al-wādī al-jadīd, 「新しいナイル河谷計画」の意) が実施された。これらの事業は、公的には約 90 万 FD の沙漠開拓地を創出し [Kishk 1999: 108]、農業・農村開発のため、一旦国営農場として保有された後、特定層の受益者に土地が分配される手はずになっていた。

第二に、1970 年代から 80 年代にかけては「経済開放と民営化」の新機軸が掲げられた。1967 年の第三次中東戦争の大敗や消耗戦の影響から、1970 年代には新規の沙漠開発事業は

ほぼ停止された。1980年代には再開され始めたが、かつて主流であった国家的農業開発や国営農場は批判を浴び、民営化や官民協同事業を通じた民間資本の役割が強調されるようになった [Hanna and Osman 1995]。1980年代の新規開拓地は公的資料の中でも57万FDから95万FDと異なるが、これ以降は情報の不確かさが顕著になる [Kishk 1999: 110–112]。1974年の「経済開放」(infitāh)と同時に、沙漠開拓地の住宅利用が推進されるようになり、人口の急拡大と都市周密化に備えた衛星都市建設が始まった [Sims 2010]。沙漠の住宅地は、都市建設にとどまらず、すでに夏季の行楽地として人気を得ていた北西海岸や紅海沿岸部のリゾート開発にも転用され拡大していった [Cole and Altorki 1998]。

第三に、1980年代末から2000年代にかけて「構造調整と新自由主義経済」の流れが出現した。この時期には、沙漠開拓地の利用・管理においても格差拡大や階層化が進行したと言われる。1990年代には上エジプトやシナイ半島など周辺地域の貧困解決のため大規模開発事業が策定され、ナセル湖沿岸部の大規模沙漠開発事業「トシュカ計画」が実施された [竹村 2014c]。しかし同時期には小作法改正等を通じた大土地所有構造の復活への端緒が開かれ [Bush 2002]、経済格差が広がる中で投資家を優遇する大規模事業には冷ややかな視線が向けられた<sup>(3)</sup>。この動きは2000年代に加速し、国際的な資本による沙漠開拓地の農場経営や豪華な郊外住宅地やリゾート地の開発、あるいは沙漠道路沿いの土地の違法利用が報じられるようになり、沙漠開拓地は「制度化された腐敗」 [Amin 2011: 37–38] や「縁故資本主義」 [‘Abd al-Fattāh 2011; Amin 2013] の主要な一部とさえみなされるようになった。

本論文の調査を行った2010年から2012年は、突如起こった「2011年革命」により第三の時期が終幕し、新たな方向性が模索されるようになった時期である。革命直後には「腐敗の浄化」が訴えられ、政策の見直しや沙漠道路沿いの違法利用の検挙が進められたが、それらは一時的・過渡的な反応にすぎなかったのかもしれない。2010年代以降の政治・経済政策の方向性が判名するのはおそらくまだ先になるが、「2013年革命」後のスィー・スィー大統領の新体制は、スエズ運河地域やシナイ半島の開発促進を掲げ、沙漠開発を新たな成長戦略の一部に取り入れているようである [土屋 2015]。

先に挙げた表1の「新しい土地」は1952年革命を始点にしているが、そこから2010年頃までの約60年で約250万FDの沙漠開拓地が耕作地として利用されるようになっている。一般に土地生産性が低いとみなされる沙漠開拓地の農業利用の可能性については多くの異論や批判があり、沙漠開拓地は増えていく一方で、より生産性の高いナイル川流域の農地が(違法な)宅地化の進行により削られ、減少していることの矛盾も指摘されている [Cole and Altorki 1998: 17–18]。それでも農業統計の数値上では、「新しい土地」が「古い土地」の3割を超えている。それだけ沙漠開発が国土の至るところに入り込み、耕作地や宅地に用いることができる新しい資源、富の源泉を作り出していることを意味する。それは同時に、この新たな富を管理する方法や仕組みを必要とすることになる。



### (3) 沙漠開拓地の行政管轄

沙漠開発によって作り出された沙漠開拓地は、一旦公的機関に管理され、その後個人や企業に処分される。農業用沙漠開拓地を管轄する公的機関は、「居住化農業開発計画公機構」(General Authority for Reconstruction Projects and Agricultural Development, 略称 GARPAD<sup>(4)</sup>)であり、住宅用沙漠開拓地の管轄は「新都市共同体機構」である。本論文で扱うバドル郡の土地は、農地を扱う公的機関によって管理されてきたので、以下その行政管轄の系統を整理しておきたい。大別して「土地開拓」(istiṣlāḥ al-arāḍī)、<sup>(5)</sup>「沙漠居住化」(ta'mīr al-ṣaḥrā')、<sup>(6)</sup>「土地居住化」(ta'mīr al-arāḍī) の三系統が観察される。

第一の「土地開拓」系統は、1954 年に農業省に設置された「土地開拓常設機構<sup>(5)</sup>」を端緒とする。これは、未耕作の耕作可能地である「荒蕪地」(al-arāḍī al-būr) の調査や政策提言をおもな活動内容としていた。同機構は 1955 年に灌漑省管轄に移り<sup>(6)</sup>、1958 年に開拓地取引の原則を設定した<sup>(7)</sup>。1960 年に農地改革省に戻り、同機構の理事会や職務規定に関する内規を定めた<sup>(8)</sup>。1961 年には行政官庁改組改編に伴い、「土地開拓公機構」と改名され<sup>(9)</sup>、続く 1962 年に「土地開拓エジプト公機関」に改組され、開拓地における経済開発と投資促進を活動目的に加えた<sup>(10)</sup>。1965 年には、「開拓地利用開発エジプト公機関<sup>(11)</sup>」(Egyptian Authority for the Utilization and Development of Reclaimed Land, 略称 EAUDRL [El-Abd 1979]) に改組され、全国各地の開拓地・荒蕪地の耕作と関係する計画の準備、開拓地の払い下げ、農村社会開発など多岐にわたる活動内容を定められた。EAUDRL は全国の開拓地事業を統括する上位機関であったが、1971 年には民営化推進のため廃止が宣言された [Waterbury 1971]。傘下の国有開拓地は地域ごとに設置された農業公社に振り分けられ、それらを統括する上位機関は「土地耕地化開発エジプト公機関<sup>(12)</sup>」(Egyptian General Organization for Land Cultivation and Development, 略称 EGOLCD [Tadros 1975: iii]) に改組された。この EGOLCD は後の GARPAD には加わらず、農業公社の民営化を進めた。

第二系統の「沙漠居住化」は、西部沙漠をおもな管轄範囲としていた。最初に「沙漠居住化公機構<sup>(13)</sup>」が 1959 年に軍事省に設置され、西の隣国リビアとの国境地帯を含む広大な西部沙漠のオアシス集落周辺を対象として、耕作可能地の調査や政策提言全般を担った。1961 年には同名のまま大統領府に管轄を移し、当時計画が策定されたばかりの「新河谷計画」に関する沙漠地の耕作や処分<sup>(14)</sup>、調査や事業監督を統括する上部組織となった<sup>(15)</sup>。1962 年に農業省に管轄を移され、「沙漠居住化エジプト公機関<sup>(16)</sup>」の名に再編された。新河谷計画は、多数の井戸やポンプを設置したが、地下水位の低下やそれに伴う事業進捗の遅れなどから事業的には成功しなかったが、同地域に同名の「新河谷県」を設置する下地を作った。同機関は 1969 年には土地開拓省に移され、「沙漠居住化公機関<sup>(17)</sup>」と改名された。1971 年には「沙漠事業実務局<sup>(18)</sup>」に改組され、1975 年に GARPAD に吸収されるに至った。

第三の「土地居住化」の系統は、タフリース県計画と EARIS を源流とする。「タフリース県機関」は 1954 年に内閣府に設置され、予算決定、計画策定と実施、土地払い下げに関する広汎な独立権限が認められていたが<sup>(19)</sup>、軍出身の主導者ハサネインの失脚により 1957 年

には第一系統の「土地開拓常設機構」に編入され、農地改革省の管轄下に移された<sup>(20)</sup>。しかし、1962年に軍勢力が農政勢力に勝利したため [Springborg 1979]、「土地居住化エジプト公機関<sup>(21)</sup>」が新たに設置され、前述した第一系統の「土地開拓エジプト公機関」からタフリール県と EARIS が引き抜かれ中核事業にされた<sup>(22)</sup>。このとき「タフリール県機構」が新設された<sup>(23)</sup>。1965年に EAUDRL が設置されると、「土地開拓エジプト公機関」はその傘下に組み込まれ、1969年には「土地居住化公機構」に改編された<sup>(24)</sup>。EAUDRL は 1971 年の廃止により「居住化農業事業エジプト公機構」に改組され<sup>(25)</sup>、最終的には 1975 年に前述の「沙漠事業実務局」との吸収合併により「居住化農業開発計画公機構」(GARPAD) が設置された<sup>(26)</sup>。現在、GARPAD はエジプト全土の農業用沙漠開拓地を統括する機関であり [Sims 2014: 78–81]、沙漠開拓地に関わる現行法 1981 年法律第 143 号においても「本機構」(al-hay'a) と呼ばれる。

なお、「タフリール県機構」は 1971 年の EAUDRL 廃止後、GARPAD へと続く第三系統ではなく、第一系統の EGOLCD に編入された。民営化により開拓地が地域ごとに数万 FD の農業公社(後に公的部門企業)に改変される中、旧タフリール県計画地域の南側半分を占める「南タフリール地区」(qitā' janūb al-tahrīr) も、1975 年に約 4 万 FD の開拓地を有する「南タフリール農業社<sup>(27)</sup>」(sharika janūb al-tahrīr al-zirā'īya) として再編された [Waterbury 1971]。同社は 1970 年代から 90 年代にかけて、同地域の土地行政を管理し、土地の払い下げを進めていった。構造調整と民営化がさらに推進された 1990 年代には、南タフリール農業社も 1994 年に清算命令を受け、保有開拓地の大半を売却・賃貸した<sup>(28)</sup>。同社の資産の多くは 2001 年に設置された地方行政体「バドル郡」の諸機構に引き継がれ<sup>(29)</sup>、地域社会の基盤となっている。

## 第 4 節 調査地バドル郡の成り立ち

### (1) タフリール県から南タフリール地区へ

バドル郡は、1950 年代の沙漠開発事業「タフリール県」(mudīriya al-tahrīr / Tahrir Province) を始まりとし、最初期の開拓村や中心部の町マルカズ・バドルを含む、同計画地域南側半分の「南タフリール地区」を前身とする。計画名のタフリールはアラビア語で「解放」(liberation) を意味し、1952 年革命による外国勢力(特にイギリス)からの解放が含意されている。立案者は、西部沙漠に駐屯した経験を持つ軍人マグディー・ハサネイン少佐とされ、1952 年革命を実行した自由将校団の支持者として知られる [Hopkins 1969: 128]。彼の部隊の調査・策定により、タフリール県計画地は、ナイル・デルタの西側一帯を北西に向かって流れるブハイラ運河のさらに西側の沙漠地とされた。ブハイラ運河からアレクサンドリアに向けて分岐するヌバーリーヤ運河を北辺とし、カイロからアレクサンドリアに走る沙漠道路を南辺とする。ハサネインらは、1953 年 3 月 20 日に内閣総理大臣宛にタフリール県設置委員会

の要望書を提出し、翌日の討議を経て、25 日に同委員会の設置が閣議決定された。当時総理大臣を務めていたムハンマド・ナギーブ（後のエジプト初代大統領）が形式的に理事長を務め、ハサネインが副理事長として実質的な指導者となった [Ḥasanayn 1975: 105]。

事業計画の立ち上げや運営理念は、ハサネインが後年執筆した回想録『沙漠——革命と富：タフリール県物語』[Ḥasanayn 1975] に詳しく示されている。これによれば、タフリール県の目的は、農業生産の拡大や水資源の利用、雇用促進、そしてエジプト農民の社会・文化的な刷新にあった [Ḥasanayn 1975: 101–104, 124–126]。ハサネインはこれを「エジプト的課題」(al-qaḍāyā al-miṣrīya) と呼び、以下のように述べた。

このエジプト的課題は、タフリール県の労働の場に存在し、私はこの課題を解決することなくして、沙漠の開拓と耕地化には何の価値もないと考える。いや、さらに言えば、沙漠の開拓と耕地化はこれの解決なしに成功することすらできない。開拓と耕地化を行う外国企業はこのエジプト的課題に立ち入ることがない。[Ḥasanayn 1975: 125]

このような社会改革思想にもとづき、最初期の入植者は一定の社会的基準にもとづいて選抜され、計画的な街区に建てられた近代的な住居に住まわせられ、西洋風の衣服を着用し、音楽やスポーツの教養を身につけることが要求された。タフリール県計画は、この時期の近代化志向<sup>(30)</sup>の農村社会・農民改革の一例として、稀有な事例を提供している [El Shakry 2007]。

しかし大多数の者にとって、タフリール県計画は灌漑と耕作地拡大の事業であった。ハサネインの計画もこの点を抜きにして論じることはできない<sup>(31)</sup>。たとえば、1953 年 3 月 20 日に提出された事業要望書には灌漑・耕作に関する三段階が示されていた。第一段階は 3 万 FD の土地耕作を目指し、その内 2.4 万 FD は溜水灌漑で、残りは最大 6 メートルの揚水が必要とした<sup>(32)</sup>。ブハイラ運河から主水路が掘られ、地域内に支水路を張りめぐらせることになっていた。実際に主水路はハサネイン期に掘削され、「ナセル運河」と呼ばれる。計画の第二段階は最大 10 メートルの高さの揚水を伴う 20 万 FD の耕地化を、第三段階は（アスワン・ハイダム建設を前提として）最大 20 メートルの高さの揚水を伴う 4 万 FD の耕地化を予定していた [Ḥasanayn 1975: 399]。こうして創出される沙漠開拓地は、当時の農地改革政策と同じくエジプト農民に分け与えられると期待されていたが、ハサネインはソヴィエト式の集団農場を志向して開拓地の分配を遅らせており、最初に土地分配を行ったのは農地改革主導者の一人であるサイイド・マレイ<sup>(33)</sup>であった [Sabea 1987: 41–42]。

計画名の通り、「県」(mudīrīya<sup>(34)</sup>) の創出を目指したタフリール県計画は、1957 年のハサネインの解任後、さまざまな機関の間を流転し、その途上で計画地の中心部であった南側地域の「南タフリール地区」と、アレクサンドリアに近い北側地域の「北タフリール地区」に分割された。南タフリール地区は隣接するブハイラ県コーム・ハマード郡に含まれるようになり、その状況は 2001 年のバドル郡設置まで続いた。南タフリール時代の社会状況は、1980 年代に実施されたいくつかの調査から明らかにされている。

前節の政治経済に関する記述で述べたように、沙漠開拓地の政策的見直しは、サダト期の1970年代に始まったが、1980年代には南タフリールのような個別の事業計画の評価や研究も行われるようになった [Atef 1987; Hopkins *et al.* 1988; Sabea 1987; Sukkary-Stolba 1985]。中でも主要な研究報告は、カイロ・アメリカ大学のニコラス・ホプキンスが同大学の社会調査研究所と共同で実施した調査報告書『エジプトの新しい土地への参加と社会：南タフリールの事例』である<sup>(35)</sup> [Hopkins *et al.* 1988]。

この調査では、すでに南タフリールに移住し、開拓地を得た「受益者」(muntafi‘ūn) ——これは公的政策を通じた開拓地の受領者を指す用語で、「小規模農業者」(ṣighār al-zurrā‘)、  
「大学卒業者」(khirrījūn / kharīgīn)、「公務員」(muwazzafūn) 等の下位範疇がある<sup>(36)</sup>——が集住する村を三つ選び、受益者が加入を義務づけられる農業協同組合の土地保有者リストから調査対象者を抽出して聞き取りを行った。これによれば、南タフリールに移住した人々が社会関係を構築する上で参照した主要なものは、「古い土地」での「故郷」(baladīya) の繋がり、「新しい土地」固有の社会・経済的構造、すなわち、開拓地を管轄する機関・機構における職務や受益者範疇における共通性の二つであった [Hopkins *et al.* 1988: 116]。とりわけ前者は、擬制的な親族関係として働き、居住する場や職場を超えた結びつきを創出するものとみなされた [Hopkins *et al.* 1988: 117]。

この報告書執筆の中心人物のホプキンスは、上エジプト(アスユート)での自らの調査経験にもとづき、「新しい土地」を国家や開発により創り出された「国家が遍在する場」[Hopkins 1987: 4; Hopkins and Westergaard 1998b: 2]として「古い土地」と著しく異なるものと定義し、そこで個人の社会参加や協力がどのような形で行われるかに関心を持っていた [Hopkins *et al.* 1988: 124–125]。この観点からの「新しい土地」は、エジプト社会論で定番の「アーイラ」(‘ā’ila) と呼ばれる大家族・親族関係の「不在」によって特徴づけられ、それを補うべく社会的紐帯が再創出される場として理解される。ホプキンスらの研究では、この地域に移動してきた人々は、国家や開発によってもたらされるサービスやインフラに依存しながら、出身地から持ち込んだ社会関係にもとづき、あるいは、新たにそれを軸とした社会関係を再創造することで、萌芽的な社会関係を形成していた<sup>(37)</sup>。

この報告書は1980年代半ば当時の南タフリール社会の概要をよく伝えるが、調査対象者を受益者に絞ったことで、考察対象とされなかった社会層がある。それは、経済的可能性に賭けて、土地分配の確たる保証もないままに、自らの意思で開発計画地に移動してきた「自発的な移住者」——この報告書の中でも引用された開発人類学者サイアー・スカッターが提唱した、さまざま社会層からなる人々 [Hopkins *et al.* 1988: 5; cf. Scudder 1991] ——である。ただし、これらの人々が受益者から土地を譲り受けたり、先に移住した親族から誘われたりして移動した断片的な話は、この報告書の中にも散見される [Hopkins *et al.* 1988: 66–72]。

バドル郡の社会状況は、沙漠開拓地の他地域との比較からも位置づけることができる。先に序文の一部を引用したコウルらの研究報告書 [Sherbiny, Cole, and Girgis 1992] は、1990年代初めに西部沙漠の五ヶ所で行った質問票を用いた調査で、各地の社会構成や投資家と労

働者の考えや実践の把握を目的としていたが、調査地の一つが南タフリール地区であった。南タフリールは、社会的・経済的にベドウィンの比重の大きい北西海岸と比べて、カイロやデルタからの移動者が多いこと、北西海岸に多い牧畜業や観光業ではなく農業や商業を主要な経済活動とすること、「先住民」ベドウィンとの間の土地や水を巡る争いが少ないことなどを特徴とする〔Sherbiny, Cole, and Girgis 1992: 4, 14–15, 23, 30–31, 41〕。南タフリールに近いサダト市は、同じく「新しい土地」であるが工業都市である点で性質を異にする。ワーディー・ナトルーンは、古くからのオアシスとして先住者と移住者によって構成されるが、主要産業を農業や商業とする点で南タフリールにより近いと論じられる。全般に、投資家は事業を行う場所に長く滞在するケースが多く、労働者は移動を繰り返す傾向にあるが、その中でも南タフリールとサダト市の人々は、故地を離れない傾向にあるベドウィンとの対比から、「別宅」を持つ割合がもっとも多いという〔Sherbiny, Cole, and Girgis 1992: 16〕。

南タフリールを扱った研究や報告書は 1990 年代初頭までで、その後は見られない。おそらく南タフリールは開発から数十年が経過し、すでに一定の評価もなされていることから、これ以上論じる必要性がない、または、より新しい開発計画地を優先するべきだと思われるのであろう<sup>(38)</sup>。私はこの地域が「バドル郡」、すなわち中位の地方行政体を形成したことが、こうした考えの背景にあるのではないかと考えている。開発計画地が一つの地方行政体になれば、それは、開発計画地でもなく、伝統的な農村社会でもない、「どちらでもない空間」になる。統計用語ではこのような土地を「古い・新しい土地」(old new-lands)と呼ぶが、この曖昧な状態が、既存の研究関心に合わず、放置されてきたのではないか。この点で、大都市近郊に膨れ上がる「郊外」に対する研究上の関心の低さに似たものを感じる。

「古い・新しい土地」となることは、沙漠開拓地における社会建設と人口移動が成功した場合、避けては通れない道である。全国各地に沙漠開拓地が広がっている現在、この「古くもなく、新しくもない」状態は、もはや、単なる不規則や例外ではなく、現代エジプトに進行している「変化」の諸相そのものであり、研究対象に据えるべき事柄なのである。ここに、比較的古い沙漠開拓地であるバドル郡の社会的な諸側面に注目する意義がある。

## (2) バドル郡の現状

以上の歴史的経緯を持つバドル郡の具体的な側面は本論文の各章において語られるが、その前に各種統計からおおよその姿を示しておきたい。

バドル郡は、ブハイラ県を構成する 15 の「郡」(markaz)の一つであり、最も新しく設置されたものである。ブハイラ県は、ナイル・デルタの北西部に位置し、ラシード支流より西側の地域名として古くから歴史書に知られる〔Ramzī 1994a: 20–26; Ramzī 1994b: 28–34〕。ブハイラの語は、アラビア語で「海」や「大河」を指す baḥr の縮小形 buḥayra であり、現代標準アラビア語では一般に「湖」を意味する。アフラム政治戦略研究所の『ブハイラ県』によれば、ブハイラの語は、正則アラビア語で「窪地にある塩地」を意味し、海に近いこの地域の特質を捉えてそのように呼んだか、湖が連なっているためにナイルの氾濫時に地域の

土地が水底に沈んだことからこの地域を湖に喩えたか、のいずれとされる [al-‘Alība 2004: 7]。

このようにブハイラ県の名は、水辺の多い環境と結びつく。ただし、ナイル・デルタの中心部に位置するガルビーヤ県などとは異なり、ナイルの氾濫域の外れに位置することから、湖沼や沙漠の後背地を有することでも知られる。地質の点ではおもに三種に分けられ、県庁所在地のダマンフルの周辺にはナイルの沃土、重い黒土が広がるが、南西部のホーシュ・イーサーやアブー・マターミールなどはナイルの氾濫域からやや外れているため石灰質の土が多く見られ、バドルとワーディー・ナトルーンは氾濫の届かない地域であるため、砂礫地が広がる [al-‘Alība 2004: 14]。この地域性はブハイラ県の公式ウェブサイト（2009 年）に掲載された統計情報によく表れており（表 2）、開拓地を有する三つの郡（表 2 の 2、4、15 番）はどれも西側が沙漠と面した地域である<sup>(39)</sup>。

表 2: ブハイラ県の基本情報

	郡・市名	面積 (FD)	人口 (人)	都市	農村	農地 (FD)	開拓地
1	ダマンフル	94,275	707,574	250,287	457,288	78,542	
2	アブー・マターミール	274,095	453,649	51,513	402,136	241,797	155,488
3	アブー・ホンモス	116,996	425,847	40,789	385,058	99,770	
4	ディリングアート	249,456	315,543	43,215	272,328	231,171	155,290
5	マフムーディーヤ	49,864	230,149	29,777	200,372	44,343	
6	イーターイ・パールード	72,762	390,802	42,137	348,665	64,384	
7	ホーシュ・イーサー	73,282	189,349	49,016	140,333	61,061	
8	ラシード	47,079	201,446	91,231	110,215	32,837	
9	ショブラーヒート	44,756	233,574	29,087	204,487	38,902	
10	カフル・ダウワール	129,432	805,093	263,592	541,501	113,204	
11	コーム・ハマーダ	71,589	407,827	37,602	370,225	61,551	
12	ワーディー・ナトルーン	207,000	73,616	22,124	51,492	52,557	
13	ラフマーニーヤ	27,422	137,108	30,623	106,485	24,215	
14	エドク	53,915	157,703	100,798	56,905	23,437	
15	バドル	204,151	162,739	22,106	140,633	165,450	165,450
	合計	1,716,074	4,892,019	1,103,897	3,788,123	1,333,221	476,228

（ブハイラ県公式ウェブサイト [http://www.behera.gov.eg/data\\_area.aspx](http://www.behera.gov.eg/data_area.aspx) より作成。最終アクセス 2009 年 4 月 18 日）

この表の「都市／農村」区分は、行政区の種類から機械的に分類されるものだが [Hopkins and Westergaard 1998b: 2]、ある程度の傾向を掴むことはできる。都市人口が突出して多いの

は県都ダマンフルと工業都市カフル・ダウワールで、これら二つにしても、農村部に都市部の倍近い人口を抱えている。唯一、農村部より都市部の人口が多いのはエドクとラシード（ほぼ均衡）で、これら二つは地中海沿岸にある都市的環境にある。他の郡は農村部の人口の方が圧倒的に多い。バドル郡（15 番）は、面積は上位 4 番目と広い方だが、人口は下位 4 番目と少ない方にある。かつて南タフリール地区が属していたコーム・ハマード郡（11 番）を見ると、面積が狭く、農地の割合が高く、人口の 9 割が農村に居住する点から、「古い土地」に典型的な農村社会であることが推測される。これら統計上の見かけからも、「古い土地」と「新しい土地」との違いが明らかである。

バドル郡で発行される『バドル郡要覧：2009 年』[‘Ammār n.d.] には、バドル郡の集落構造や社会状況のより詳しい情報が記されている。これを作成した情報局は、第 2 章で紹介されるように、内閣府の直属機関で各地方行政体に支部を持ち、省庁横断的に情報を収集し、政策決定支援を目的としている。この情報局の報告によれば、2010 年時点の推定人口は 171,094 人と表 2 より微増だが、郡面積は 292,740FD と表 2 の約 1.5 倍の数字が計上され、耕作地は 211,065FD と約 1.3 倍である。郡は、都市部である一つの「市」(madīna) と、農村部の村を管轄する六つの「地方単位」(waḥda maḥallīya) から構成される。報告書は、人口や教育、農業など部門ごとに分かれているが、合わせると以下ようになる（表 3）。

表 3: バドル郡の村ごとの人口と教育・保健施設(名称の／以下は別称、☆印は地方単位の主要村)

No.	市・村名	人口	単位ごと	割合	中 学	高 校	保 健
1	☆バドル市／マルカズ・バドル	23,184	23,184	14%	1	6	3
2	☆アフマド・オラービー／ハムサ	3,893	11,674	7%	3		1
3	アブドウルハミード・アブー・ゼイド	3,236			1		
4	ナビール・ワッカード	4,545			1?		
5	☆ウンム・サーベル	7,600	23,632	14%	1	1	2
6	オマル・シャーヒーン	8,781			1		1
7	ミンシャア・アーミル／ソフナ	7,251					1
8	☆オマル・マクラム	10,203	37,028	22%	1?		1
9	サラーフッディーン／ラバア	13,251			2		1
10	アムル・ブン・アース／スィーン	2,409			1?		1
11	アブドウルマギード・ムルスィー	4,681			1?		1
12	ムスタファー・カーミル	1,914			1		
13	イーマーン／ヤー	1,664					
14	イーマーン／ハー	1,784					
15	イーマーン／ター	1,085					1
16	カマルッディーン・サラーフ	37					

17	☆ナガーフ	7,938	46,974	27%	1	2	1
18	キファーフ	6,389			1		1
19	マアラカ	15,028			1		1
20	アズィーマ	5,914			1		1
21	ティッル・キビール	4,525			1?		1
22	アイン・ガールート	4,606			1		1
23	ファールージャ	2,574			1		1
24	☆バグダード	4,542	20,225	12%	1		1
25	ヒラー	1,549			1?		1
26	アブドゥッサラーム・アーリフ	2,450			1		1
27	ハーリド・ブン・ワリード	4,024			1		
28	オスマーン・ブン・アッファーン	3,147			3?		1
29	アリー・ブン・アブー・ターリブ	4,513			1		1
30	☆アブー・バクル・スィッディーク	3,940	8,877	5%	1		1
31	オマル・ブン・ハッターブ	2,962			1		1
32	ハルトウム	522					
33	マグド	599					
34	フィラスティーン	295					
35	登録された諸組合	559					
	合計	171,594		100%			

【『バドル郡要覧: 2009 年』[‘Ammār n.d.]より作成】

バドル市はタフリール県計画以来の中心地で、住民からはマルカズ・バドルと呼ばれる。人口は約 2.3 万人で、郡全体の約 14%を占める<sup>(40)</sup>。六つの地方単位（村役場が置かれる主要村には☆印）は、『バドル郡要覧』の表の順序のまま仮の番号を振った。歴史的な由来からすれば、ウンム・サーベルが最初に設置された村であり、オマル・シャーヒーンやオマル・マクラム、サラフッディーン、アフマド・オラービーがこれに続く。地理的には、バドル郡の東側にブハイラ運河が流れ、そこから分岐したナセル運河が流れるが、先に述べたウンム・サーベルの単位管轄地域はナセル運河の上流側である南東部に位置し、その西岸にアフマド・オラービー単位がある。ナセル運河に沿って北西に進むと東岸にオマル・マクラム単位、西岸にマルカズ・バドルがある<sup>(41)</sup>。オマル・マクラム単位はナセル運河をさらに北上した郡の北東部一帯を含む。ナセル運河は二つに分岐し、その周囲にバグダード単位とアブー・バクル・スィッディーク単位が広がり、さらに西にナガーフ単位がある。

表 3 の教育・保健施設の分布を見る限り、高等教育はマルカズ・バドルに集中していることがわかる。普通高校 (thānawī) の男子校と女子校、工業高校 (ṣinā‘ī) の男子校と女子校、共学の農業高校 (zīrā‘ī) と商業高校 (tijārī) の計 6 校がある。保健施設は、村には医師が一



人から数人駐在する保健所 (al-waḥḍa al-ṣiḥḥīya) があるだけだが、マルカズ・バドルには医師 40 人を抱える公立の病院 (mustashfā)、医師 8 人を抱える保健所、医師 9 人を抱える私立の救急病院 (musta'saf) の三つがある。これに次いで規模が大きい村がナガーフで、共学の普通高校と工業高校が各校ずつ、医師 28 人を抱える公立の病院がある。ナガーフは村落単位の中で最もマルカズ・バドルから遠く、人口移動が進み、多くの公的施設を有しているため、いずれ独立した郡となるのではと噂されている。

ホプキンスらの調査で扱われた三つの村は、それぞれ異なる移住過程や受益者を代表していた。オマル・マクラム村 (表 3 の 8 番) は 1950 年代に移住が進んだ「小規模農業者」の多い場所、バグダード村 (24 番) は 1980 年代に南タフリール農業社の「公務員退職者」が開拓地を得た場所、マアラカ村 (19 番) は 1970 年代に「小規模農業者」に土地が分けられた場所であった [Hopkins *et al.* 1988: 24–25]。マルカズ・バドルから近いアフマド・オラービー村は公務員の居所としても知られる [Hopkins *et al.* 1988: 17]。アブー・バクル・スィッディーク村周辺の地域は、企業や組合が保有する数百から数千 FD 級の大規模農場が広がる場として記述され、1980 年代には人口定着が進んでいなかった [Hopkins *et al.* 1988: 19]。現在でも人口規模が小さく、表 3 の中にも村名を冠しない「登録された諸組合」が多い。

農業用開拓地の保有状況は、『バドル郡要覧：2009 年』に記されている農業協同組合の登録農地・区画によれば<sup>(42)</sup>、以下のようにまとめられる (表 4)。

表 4: バドル郡の農業協同組合と農地 (☆印は村落単位的主要村)

No.	農業協同組合名	農地面積 (FD)	保有区画	平均	単位ごと面積	比率	区画	平均
1	☆バドル市／マルカズ・バドル	7,460	849	9	7,460	5%	849	9
2	☆アフマド・オラービー／ハムサ	19,830	835	24	35,222	23%	1,529	23
3	アブドゥルハミード・アブー・ゼイド	15	6	3				
4	ナビール・ワッカード	15,377	688	22				
5	☆ウンム・サーベル	1,649	118	14	7,472	5%	843	9
6	オマル・シャーヒーン	2,517	498	5				
7	ミンシャア・アーミル／ソフナ	3,306	227	15				
8	☆オマル・マクラム	1,469	420	3	15,033	10%	2,547	6
9	サラーフッディーン／ラバア	3,058	659	5				
10	アムル・ブン・アース／スィーン	2,792	268	10				
11	アブドゥルマギード・ムルスィー	1,018	247	4				
12	ムスタファー・カーミル	1,460	254	6				
13	イーマーン／ヤー	38	8	5				
14	イーマーン／ハー	4,936	666	7				
15	イーマーン／ター	262	25	10				

16	カマルッディーン・サラーフ	n.a.	n.a.					
17	☆ナガーフ	1,406	125	11	22,911	15%	2,545	9
18	キファーフ	5,349	364	15				
19	マアラカ	3,534	1,080	3				
20	アズィーマ	2,921	209	14				
21	ティッル・キビール	3,028	305	10				
22	アイン・ガールート	5,348	395	14				
23	ファールージャ	1,325	67	20				
24	☆バグダード	1,720	230	7	10,571	7%	1,267	8
25	ヒラー	1,162	180	6				
26	アブドゥッサラーム・アーリフ	1	1	1				
27	ハーリド・ブン・ワリード	2,401	225	11				
28	オスマーン・ブン・アッファーン	2,789	432	6				
29	アリー・ブン・アブー・ターリブ	2,498	199	13				
30	☆アブー・バクル・スィッディーク	4,030	609	7	53,822	35%	3,767	14
31	オマル・ブン・ハッターブ	3,850	315	12				
32	ハルトウーム	36	4	9				
33	マグド	1	69	0				
34	フィラスティーン	6	2	3				
35	登録された諸組合	↓	↓	↓				
	ハムサ・ワ・イシュリーン・ヤナーイル	5,776	371	16				
	オルーバ	6,897	412	17				
	アブー・マカーリム	961	94	10				
	ロワービー・ホドラ	2,318	80	29				
	ガマイーヤ・サラーム	10,010	366	27				
	ガマイーヤ・アムン・ガザーイー	4,425	103	43				
	ガマイーヤ・イフワ	2,416	91	27				
	ガマイーヤ・タハッディー	1,750	124	14				
	ガマイーヤ・ヒダーヤー	2,513	34	74				
	セッタ・オクトーベル	1,268	117	11				
	ガマイーヤ・タクワー	1,913	198	10				
	ガマイーヤ・アドル	1,340	443	3				
	ガマイーヤ・オブール	3,051	193	16				
	バサーティーン・マアラカ	1,261	142	9				
	合計	152,491	13,347	11				

[[『バドル郡要覧: 2009 年』[‘Ammār n.d.]より作成]

表4の「平均」の値は、各組合の土地面積を区画数で割った単純計算で、実際的な土地保有を反映したものではないが、ある程度の推測が成り立つ。すなわち、5FD以下の土地分配が行われたオマル・マクラムなどでは全般に規模が小さめで、10～20FDの土地分配が行われた大学卒業者や元公務員の多いナガーフなどでは規模が大きめである。対照的に、アブー・バクル・スィッディーク単位には、村名を冠しない「登録された組合」(al-jam‘īyāt al-mushahhara)が多数あり、これらの存在が土地を所有し管理している。

以上の統計や公的報告から読みとられるバドル郡の社会状況は、開発計画によって基礎づけられ、分配が進められた沙漠開拓地をもとに、人や組合が流入した「古い・新しい土地」として、耕作者を多く有する社会経済構造を持ち、公的施設もある程度普及した、地方社会の雰囲気を漂わせている。

## 第5節 フィールドワークと資料

### (1) 成り行き

本論文は、参与観察にもとづく人類学的フィールドワークを情報収集と問題発見の手段としている。フィールドワークはもはや人類学の専売特許ではないが〔西井2014〕、依然として人類学的フィールドワークは他と区別され得る特徴を有する。そこでは、考察対象の社会・文化に比較的長い間滞在し、その人々と時間と空間、行動と対話を共有し、その社会関係に擬似的に組み込まれながら、同時に観察者としての視点を持ち続け、フィールドノートに観察した事象や出来事を日々書き込み、記録可能な資料を集める。そしてこれらのデータにもとづいて論文を書き、調査対象の社会や人々に関する「民族誌」を書く。本論文の主題に掲げた「民族誌」とは、このフィールドワークからデータの作成・加工・執筆・ピアレビュー・出版の全過程を合わせたものとして想定される〔cf. 日本文化人類学会監修2011〕。

バドル郡におけるフィールドワークは、2010年7月から2012年4月にかけて断続的に行われた。私がこの地域に関わるようになったきっかけは、カイロ・アメリカ大学沙漠開発研究所の南タフリール農場（以下、大学農場）であった。500FDを超える大学農場の広大な土地は、沙漠地の学術的研究のために1981年に南タフリール農業社から賃借されたもので、長らく同研究所の研究・教育活動の柱をなしていたが<sup>(43)</sup>〔Bishay 1991〕、2015年2月、賃貸借契約の満了により大学農場の土地・建物は同社に返還された（沙漠開発研究所は他地域での活動に重点を移している）。従って、大学農場は「過去の話」になってしまったが、本論文では当時の呼称や名称を用いる。大学農場には「事務所」(al-idāra)と呼ばれる二階建ての建物があり、一階は事務管理室として用いられ、二階は技師専用の宿泊所とされた。場内には別に数十人を収容できる宿泊施設があり、沙漠農業の技術訓練のためのエジプト人学生や研究者、海外からの留学生や研究者によって利用されていた。

私が大学農場を初めて訪れたのは2004年のことである。当時私は同大学の大学院修士課

程に在籍し、修士論文の調査地を探す中で訪問する機会を得た。その後、実際に農場の住み込み調査を行い、2004年7月から8月と2005年1月から2月の合計2ヵ月半、大学農場の宿泊施設に滞在し、農場労働者と周辺村落の調査を行った。2009年9月から博士論文のためにエジプトに長期滞在した際には、国内各地を見てまわる一方で、バドル郡での追跡調査を行うため、2010年7月頃から大学農場に通い、数日から2週間程度の短期滞在を繰り返すようになった。このときは、大学農場の本部であるカイロ・アメリカ大学沙漠開発研究所（長期留学奨学金の受入機関でもあった）から許可を得て、事務所の二階にある宿泊所の一室を借りることにした。宿泊施設に泊まる場合は、三食付きで部屋はトイレ・シャワー完備であるため宿泊費も高かったが（1泊50LE）、事務所二階は食事なし、トイレ・シャワー共同であるためより安く抑えられたのである。

当初、私はすでに「ある程度わかっている」バドル郡ではなく、1990年代末に実施された大規模沙漠開発事業「トシュカ計画」を長期調査の中心にすることを考えていた。ただしトシュカ計画地がスーダン国境に近い辺境にあるため、同地での滞在には工夫が必要で、その手続きの成り行きを待つ間、私はバドル郡への訪問と短期滞在を繰り返した。このときにはバドル郡庁や南タフリール農業社、農業協同組合など、以前の調査ではアクセスすることができなかった公的部門を訪れ、また、新たに関心を持ち始めた苗農場の調査を始めた。その一方でトシュカ計画地での滞入手続きは進まず、さすがに焦りを感じ始めていた頃、後に「2011年革命」または「1月25日革命」と呼ばれる騒動が勃発したのである。その頃私は大学農場を訪れており、情報を入手する経路は、事務所の二階に備えつけられた衛生テレビのニュースと、マルカズ・バドルで購入できる新聞（夕方にはほとんど売り切れる<sup>(44)</sup>）、接続がしばしば切断されるインターネット上のニュース<sup>(45)</sup>、地域住民からの口コミのいずれかであった。それらを通じてある程度騒動が起きていることは把握していたが、バドル郡には緊迫感はなかった。「怒りの金曜日」の名で知られる、全国各地でのデモ隊と警察との衝突に発展した1月28日には、私はかねてより誘われていた苗農場関係者の祝宴に参加していたくらいである。しかしその日の夜になると、全国各地の騒ぎの様子はニュースやテレビ報道を通じてバドル郡にも伝わり、住民も不安と困惑をもってテレビを注視するようになっていた。私も翌29日にはカイロに戻り<sup>(46)</sup>、その後はカイロに残って情報を集め、現場を見るようにしていた。

2月11日にムバーラク大統領は辞任し、軍による統治が始まったが、直後は情勢が明らかではなく、地方の治安や交通状況にも乱れが見られたため、私はカイロから動くことができずにいた。しかし3月末に最初の憲法改正の国民投票が行われた頃になると、ようやく治安状況も安定してきたため、この頃から徐々に大学農場への訪問を再開し始めた。長い間、強権的な支配の安定に慣れていたので、エジプト人たち自身も新たな展開に戸惑っていたように見えた。しかしトシュカ計画地での調査の手続きや交渉はすべて白紙に戻り、治安面の不安が増したため断念せざるを得ず、以後調査をバドル郡に専念することにした<sup>(47)</sup>。

## (2) 民族誌的対話者

前述の通り、2010年7月から2011年1月までは大学農場に滞在しながら、バドル郡の外から日々農場に働きに来る労働者や技師を相手にし、また、そうした人々が住む集落の一つであるX村をおもな調査対象としていた。この頃、行動をともにすることが多かったのが、X村に生まれ育った30代半ばの男性のYである。Yはかつて大学農場に勤めていて、過去に大学農場を訪れた2004年に出会った。当時は、大学農場の中で果物の苗を育てる部門でビニール・ハウスを担当していた。2010年7月に私が大学農場を再訪した際、農場内にYの姿が見えなかったが、X村の喫茶店で再会することができた。Yはすでに大学農場を辞め、マルカズ・バドル近郊にある野菜や果物の苗を育てる農場、「Z農場」に職場を移していた。私はYに会うためにZ農場を訪れ、その経営者であるZ(当時30歳前後の男性)と知り合い、次第にZ農場に興味を持ち、頻繁に訪れるようになった。しかし大学農場とZ農場の間は数キロの距離があり、公共交通も整備されていないため、日常的な移動には不便が多かった。また、大学農場に滞在する中では、買い物や各種サービスのために町に出かけることが多く、マルカズ・バドルの生活上の重要性が常々感じられていた。

そのため「1月25日革命」を経て、バドル郡での調査に専念することになった私は、マルカズ・バドルに居所を移す必要を感じ、市内のアパートを探し始めた。実際に市内に住むZなどの協力を得て、不動産仲介人とも知り合い、いくつか物件を見たが、条件を満たすもの(家具付き、Zの家から近い、安全で静かな地域、低層階など)はなかなか見つからなかった。その中で出会ったのがGのアパートである。大家のGは、3階建ての自宅の各階を独立したアパートにして、その2階部分を賃貸していたが、2011年7月初旬に前の借主が退去することになり、不動産仲介人に情報が寄せられ、私に伝わってきた。私はGのアパートの様子を見て、Gの人柄を気に入り、入居することに決めた。

こうして2011年7月以降、フィールドワークの中心は大学農場からマルカズ・バドルに移った。私は大学農場に通ったり、Z農場を訪れたり、あるいは、町中にある新聞屋に行って新聞を買い込み、その隣にある喫茶店に腰を据えて熟読したりする日々を過ごすようになった。住民の大半が互いに知り合いであるX村の中では決まった行き先以外に路地を散策することは難しかったが、マルカズ・バドルでは人の目がそれほど厳しくなく(それでも勝手に町並みや看板などを写真に撮っていたりすると、呼び止められ、詰問されることもあったが)、自由に動きまわり、店や通りを見てまわることができた。飲食店も多く、マルカズ・バドルには確かに「町」の自由な雰囲気があった。

そうした中、私は町や村の住宅発展に関心を持ち、どのような形で土地がやりとりされ、人が住み、家を建てるのか、話を尋ねてまわるようになった。さらに、Gのアパートに住み始めてから数ヶ月がたった2011年10月頃を境にして、私はG一家と打ち解け、Gのアパートに気軽に出入りすることができるようになり、次第にほとんど毎日のように訪れ、昼食や夕食を食べたり、紅茶を飲んだり、テレビを観たり、パンや肉などの食材を買って帰ったりするようになっていった。Gは50代の男性既婚者で、妻と、私とほぼ同世代の二人の息

子（長男 A と次男 B）がいた。長距離マイクロバスの運転手をする A は既婚者で G の家の 1 階部に住んでいて、未婚の B は両親と同居していた。息子たちは家を空けることが多く、私の話し相手はもっぱら G と G の妻であった。

### (3) 資料

フィールドワーク中に起こった会話や出来事は、その日の内にノートに書き込まれた。ノートは基本的に日本語で書かれ、重要と思われた単語や表現にはアラビア文字やローマ字転写を書き加えた。フィールドワーク中の会話は、ほぼすべて口語アラビア語でなされた<sup>(48)</sup>。言葉や習慣の壁は大きく、私は相手の言うことすべてを理解できたわけではなかったが、通訳は用いず、私自身が日本から来た「社会学<sup>(49)</sup>」の調査者であることを知らせた上で、見聞きした言葉や出来事を、私が理解した限りにおいてノートに書き込んだ。ノート上では、自らの感想と出来事の事象は分けて記録した。大概、自分の部屋やアパートに戻り、一人になったときに、わずかなメモと記憶を頼りに、その日にあった出来事や会話を書き起こした。必然的にフィールドノートに書かれた情報は、私が頻繁に会っていた人物（Y や G、Z）のことが多い。彼らが語ったこと、行ったことが記録され、それを私が後になって整理し、彼らが何をしようとし、何を考えていたのかを考察したことが、本論文の材料となった。

フィールドワーク中は、調査票を用いたインタビューをほとんど行わず、共同の会話や作業をする中で話を聞き、行動を観察しながら、「〇〇についてどう思うか?」「××について知りたいがどうすればよいか?」といった問いかけを加えて、会話の機会を広げていった。公的立場の人たちから話を聞いたわずかな機会を含めて、録音機・IC レコーダーは一切用いなかった。機械による録音は、会話や言葉を正確に記録することができる利点がある一方、相手に余計な警戒心や恐怖心を喚起し、国家権力（自国・外国を問わず）と繋がっている風評を引き起こす恐れがあった。「スパイ」（*gasūs*）の呼び名は、半ば冗談で用いられることもあれば、半ば本気で私に対する中傷や不安の表現として用いられたので、誤解を受けぬよう注意する必要があった。小さなメモ帳はつねに携帯していたが、人々は私がメモ帳に何かを書き込むことですら不安と興味を抱き、何を書いているのか開示を求められた。慣れてくると「この話は重要だからメモしろ」や「諺を教えてやるからメモ帳に書け<sup>(50)</sup>」などと軽口の対象にもなった。当初はつねにデジタルカメラは持ち歩いていたが、女性の撮影に抵抗がある人がいたり、無用な警戒心を引き起こしたりすることがあるので、次第に持ち歩くことが少なくなり、結婚の祝宴や遠出などのイベント時に限られるようになった。祝宴では、私自身が写真や動画をとることが多いが、頼まれてカメラを貸し、彼ら彼女らが自由に撮影し、その一部を相手のパソコンに移したり、印刷してプレゼントしたりすることもあった。

このように本論文はフィールドノートを主要な資料とするが、同時に、フィールドワーク中に得られたさまざまな文字資料を用いている。それらは私が入手し、読み込んだものであるが、周囲の人々との付き合いの中で存在が示唆され、その内容について尋ねることで理解が深められたものでもある。そのような文字資料の最も日常的な形態は「新聞」であった。

マルカズ・バドルでは新聞を買うことができた。日刊紙は 1LE と安価であったが、多くの人々はその分を他の支出に充て、自分では買わずに他人が持っている新聞をまわし読みし、最後に人知れず持ち去ることもしばしばであった（そのため私はつねに数紙購入していた）。その意味では、新聞は単なる資料ではなく、特定の話題を切り出すためのきっかけになり、物々交換の資源にもなった。また、新聞に書かれている出来事の解釈を論じあう中で、メディアで用いられる言葉と、自分が接している人々が持つ言葉や考え方の違いを目の当たりにすることができた。

「歴史書」や「契約書」などは、バドル郡の歴史について人々に尋ねてまわる中で、初めてその存在を教えられ、手に入れることができた資料である<sup>(51)</sup>。「歴史書」からは地方行政や政治への関心が、「契約書」からは土地や所有権に関わる法制度への関心が生まれ、それらをより詳しく理解するために、首都カイロで出版・頒布される法令書を読む必要が生まれた。正則アラビア語で書かれた法令を読むためには、当然のことながら、日常的なアラビア語読解能力だけでは足りず、すでに相当の専門的な研究蓄積がある法学研究にあたる必要がある。門外漢の私がそれらを十全に理解できたとは言えないが、少なくともそうした研究群の存在に気づき、これを研究に加える発想を得たことは、まさにフィールドワークの予期せぬ収穫の一つであった<sup>(52)</sup>。

「民族誌」を謳う限り、開発を扱い、国家法や政治に関わる文字資料を用いたとしても、周縁性や非エリート層を考慮し、権威的・主流ではない人々の視点や声を意識することは決して失われてはならないと考える [cf. クリフォード 2002: 107]。それは、法令や規則を扱う場合でも、それを用いて実際に行動する人間の考えやその文脈に十分注意すること、確立した体制や制度を扱う場合でも、その周縁にあるグレーゾーンに着目すること、公的立場からの思想や政治体系を扱う場合にはそれらがローカルに接合する局面に焦点を当てることを意味する。法を扱う場合でも、その規定が実際に人々の生活にどのような影響を与え、人々がそれをどのように利用するかが重要になる。人類学的フィールドワークを用いる最大の意義は、調査対象者のみならず調査者たる自らの考えや振舞いすら記述・考察の対象としつつ、他分野の研究方法から見向きもされないところに目をつけ、そこから新たな視点や議論を作り出すところにある。本論文において、私がバドル郡という、古くもなく新しくもない沙漠開拓地を生きる普通の人々に着目した理由は、まさにこの点にある。

## ＜要約作成に関する付記＞

竹村和朗

以上は、本博士論文の冒頭表紙から序章の末までに相当する部分である。これより先の本論文 28 頁から 210 頁、すなわち第 1 章から第 6 章、終章、註、参考文献に相当する部分は、博士論文をもとに改稿した書籍の刊行に近い将来期待されるため、本要約では省略した。

以上